真と偽　～シントギ～

非露西

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真と偽　～シントギ～

【Ｎコード】
Ｎ６９６４Ｔ

【作者名】
非露西

【あらすじ】
何の変哲もない高校生活を送っていた少年・白羽　誠の日常はある日を境に非日常と化す。
自分を狙う者、自分を護る者、自分が護りたい者、そして、真と偽で成り立った世界そのものが誠の心を、力を、運命を変えていく。

序章／動き出す運命

午前１１時５６分。

この世界の一日の内で最も暗い時刻。
町全体が闇と静寂に覆われ、どこを見渡しても黒に染まった風景しか拝めない。
灯かりといえば町一帯を遥か上空で穂のかに包んでいる月明かりか、町を点々と照らしている電灯くらいのものだ。
何故ならこの町はこの時刻になると一斉に灯かりが消える。
住宅街は勿論の事、駅前や商店街も真っ暗である。

そんな中、ある家の一室にポツンと灯かりがついている。
囲まれた家々と同じような戸建ての二階の部屋。
光の漏れているカーテンの隙間から少年の姿が見える。
寝間着姿の少年はテレビの前で胡坐(あぐら)をかき、テレビゲームに熱中している。

それを遠くの方で見ている者がいた。
月明かりの逆光で誰かはわからないが、シルエットからして男だろう。
少年を凝視している男はそのまま携帯電話を開き、耳に当てる。
液晶の照明がより一層周囲を暗くする。

『どうかしら？彼の様子は』
受話器に耳を当てなくとも聞こえるほどの甲高い声。
相手は女だ。

「……情報通り、やはりただの少年にしか見えないな」

『でしょう。私も直接見たわけじゃないけど彼が重要人物とはとても思えないのよね』

「それを決めるのは俺達じゃなく上の人間だ。俺達がどうこう言っても何も解決しない」

男は眠い目を擦って必死にゲームクリアに勤(いそ)しんでいる少年から目線を外し、意味なく星空を見上げた。

星空は何かを物語るかのように薄く光り輝いている。

『話でもしていったらどう？少しくらいなら大丈夫でしょ』

「いや、やめておこう。無益な接触は避けるべきだ。余計な考えを起こされても困るからな。それに…」

『それに？』

「今はまだそっとしておこう。彼の世界を無理やりにでも変える必要はないからな」

『優しいのね』

そんな甘い台詞に男は眉一つ動かさずに、

「切るぞ。護衛要員は明日にでも派遣しておけ」

電話越しの女がまだ何か喋っていたが、男は構わず通話を切った。

そして再び少年へ目線を戻すと、携帯電話を折り畳んで微笑を浮かべる。

「白羽(しらは)　誠(まこと)、か。一目見ておいてよかった。彼の存在がこの世界に

どう影響するか、今後が楽しみだ」

誰に言うでもない独り言を残し、男のシルエットが煙のように消えた。

それにより辺りに静寂が戻る。

この時の少年には想像もつかないだろう。

目と鼻の先まで迫っている翌日が自分の生涯を変える一日になるなどとは。

運命の歯車は既に噛み合っている。

あとは動き出すだけ。

午後１１時５９分。

少年の運命が動き出すまで、あと１分。

第1章／変わる日常、変わる景色　前編

朝。

快晴の朝。
眩しすぎるくらいの暖かな陽射(ひざ)し。
果てしなく広がる雲一つない青空。
5月中旬であり、この天候は文字通り五月晴れ。
こんな天気なら誰もが晴々とした気分になる事だろう。
にも関わらず、快晴とは裏腹に沈んだ気分で通学路を歩く学生がいた。
彼は体を突き刺すような陽射しを浴びて不覚にもこう思っただろう。

――――　眠い。

白羽(しらは)　誠(まこと)。
陽射しの所為で余計に明るい色に見えるやや長めの茶髪、第2ボタンまで外れた学ランの下には指定のワイシャツではなく真っ赤なTシャツ、右手に雑に握られたセカンドバッグと外見は探せばどこにでもいる普通の高校2年生だ。
ただいつもと違う箇所は目の下に大きな隈(くま)ができている事。
これは昨夜に徹夜でテレビゲームに熱中していた代償とでも言うべきだろう。
だが、彼の中に後悔はない。
彼が昨晩に勤しんでいたゲームは昨日に発売したばかりのロールプレイングゲーム。
やり込み要素満載のこのゲームをたった一晩でクリア目前というところまで到達したのだから。

後悔があるとすれば、それは完全にクリアできなかった事だ。
最後に立ちはだかるボスをどうしても倒せない。

――――　帰ったら絶対に倒す。

その事だけを考えながら白羽　誠は重たい足を引きずって通学路を歩く。

と、そんな彼の背中を誰かがポンと叩く。

「おっはよ　！　誠　！　」

振り向くとそこには一人の女子高生が立っていた。

「また徹夜でゲーム　？　懲りないわねぇ…」

「うるせーよ」

北条（ほうじょう）　朱美（あけみ）。
煌（きら）びやかな赤一色のポニーテールに朱色のタイ、藍色のブレザーと一般の女子高校生以上に目立つ容姿の彼女は近所に住む誠の幼馴染みでクラスメイトである。
俗に言う腐れ縁というやつで、朱美は誠が睡眠時間を削ってでもプレイするほどのゲーム好きだという事実も彼以上に知っている。
その為、誠がどんなに目の下に隈を作っていようと彼女にとっては見慣れた光景なのである。

後ろから挨拶した朱美はスキップ混じりの足取りで誠の前に出る。

「今日が午前授業だからって気ぃ抜いてんじゃないの」

「はいはい、わかってますとも」

幼馴染みの手厳しい指摘を誠は二回返事で適当に受け流す。

「じゃ、あたし日直だから先行くね」

朱美は軽く手を振ると返事も待たずに小走りで去ってしまった。

正直に言おう。

誠は朱美のような世話好きで活発で話しやすい女性は嫌いではない。

誠のような自分の趣味にしか興味を持たない人間を気にかけてくれる人物なんて朱美と唯一無二の兄弟である姉だけだろう。

更に言うと、朱美は顔も性格もスタイルも良い上に人気もある。

どこにでもいそうな少年とは釣り合わない存在だ。

一方、朱美も朱美でそのどこにでもいそうな少年を気にかけている。

いくら鈍い誠でもそれくらいはわかる。

だがしかし。

誠の心には彼女に対する恋愛感情が芽生えていない。

いや、恐らくは一生芽生えない。

それは照れ隠しでも、彼が女性に興味がない訳でも、はたまた他の女性に好意を抱いている訳でもなく、ちゃんとした理由がある。

それは　――――

「おっす　！　誠ぉ　！　！　」
やっとの思いで辿り着いた校門の前で誠の背中をまた誰かがポンと叩く。
だが、声を聞いた誠が先ほどのように振り向く事はなかった。
「なんだよ　！　シカトかよ　！　」
腹を立てた声の主が前に回り込み、無理やり誠の視界に入ってきた。
「何か言うことあんだろ　！　おはよう　！　とか、朝っぱらからうるさい奴だな　！　とか、今日は珍しく遅刻じゃないんだな　！　とかよぉ　！　」
「……ごめん。今お前と話すと睡魔と間違えて殴っちまいそうなんだ」
「どう間違えんだよ　！　！　って言ってる傍(そば)から拳を振り上げるなあああ　！　！　」
誠の機嫌を損ねるほど喚(わめ)いている男の名は　城戸(きど)　雅紀(まさのり)。
学生の群れに紛れても一瞬でわかるほどの明るい金髪、陽の光を反射させる金属製の耳ピアス、学ランの下に着ているド派手なシャツと見るからに不良である彼は誠の親友だった。
誠と雅紀は中学からの付き合いでこちらも朱美と同様、クラスメイトである。
「…で、昨日買った例の新作はどうよ」
「それがさあ、聞いてくれよ」
自然と日常会話に戻った二人は自分達の教室までゲームの話題で盛り上がる。

傍(はた)から見れば二人は親友と呼び合えるほど仲が良く見えるだろう。
だが、もう一度言う。
城戸　雅紀は誠の親友“だった”。
過去形であるその理由は朱美の場合と同様である。
白羽　誠が二人を意識していない理由、それは　――――

北条　朱美、城戸　雅紀が“偽物”だからだ。

偽物と言っても彼らの本物がこの世に存在するかはわからない。
ただ、誠の瞳に映る彼らには心がない。
普通の日常生活を送っているように見えるが、それは全て偽(いつわ)りだ。
いや、それは彼らに限った事ではない。
家族、友達、クラスメイト、教師、テレビに映る有名人、通りすがる赤の他人と誠がこの一週間で見てきた人々は皆偽物だった。

ここで疑問が二つほど上がると思う。
一つは、何故皆が偽物だとわかるのか。
それは誠自身に宿る力によるものだ。
彼には見える。
偽物の瞳の奥に光る真紅の色が。
そう、彼は相手と目を合わせるだけで偽物かどうか即座に判断できるのだ。
とは言うものの、誠は本物の瞳がどのような色なのかまだ知らないのだが。

そしてもう一つの疑問、それは何故一週間という短い期間の中だけなのか。
それは、誠がこの異様な力に気づいたのが今からちょうど一週間前だからだ。
気づいた事はそれだけではない。
一週間以上前は自分も周りの人間と同じだった事、一週間以上前の記憶が薄れて曖昧なものになってしまった事。
何故唐突に自分の見る景色が変わったのか。
それも自分だけが。
彼自身がどんなに無い知恵を絞(しぼ)ろうとその答えは出なかった。
だから彼は決めたのだ。
今までと変わらずに普段通りの生活を送ろうと。
この変わり果てた景色が元の見慣れた景色に戻るまで　――――

何の特徴もない田舎町・日夜月町(ひやづきちょう)。
その南東に建っている普通の公立高校・日夜月(ひやづき)高校。
新設校でもなければ大昔からある名門校でもない、なんとも微妙な高校である。
こんな何の変哲もない学校に誠達は通っている。
学力のレベルは中の下。

雅紀のような不出来な生徒はちらほら見かけるが、他校の不良共が押し寄せてくるような学校ではないので安心してほしい。
クラスはA～Fと田舎町にある学校にしては多い方なのではないか。
三人のクラスは２－D。
中央の階段を一つ上がって右に曲がればすぐに到着する。

教室に着いた誠は窓際の一番後ろにある自分の席に真っ先に座るなり、顔を伏せた。
どうやら来て早々に就寝タイムに入るつもりらしい。
そこへ自分の席にセカンドバッグを置いた、瞳を赤く光らせた雅紀がまた近づいてきた。

「おいおい、もう寝んのかよ。お前は学校に何しに来てんだ」

「不良の代名詞みたいな格好してるお前にだけは言われたくねぇ。それに1限はホンセンの現代社会だろ」
ホンセンとは担任である本田先生の略である。

「あのいい加減人間が俺の睡眠を妨害するとも思えねえしな。という訳で1限終わったら起こしてくれ」

雅紀の返事を待たずにガラガラと教室の引き戸が開いた。

「ほら、席着け」
寝癖と顎鬚の剃り残しが目立つ担任・本田が頭を掻きながら入ってくるのが音だけでわかった。

「さて、と。そんじゃHR始める前にお前らの好きな転…生を…介…る。…ってい…ぞ」
ホンセンが何か重要な事を言っているようだが、迫り来る睡魔が知

覚能力を奪い、そこで誠の意識は途切れた。

時間の経過というのは恐ろしいものだ。
どんなに長い時間でも睡魔に敗北してしまえば一瞬に感じてしまう。
今深い眠りについている白羽　誠も被害者の一人だ。

「……と」
誰かが耳元で叫んでいる。

「…こと」
うるさいぞ、もう少し寝かせろ。

「誠　！　！　」

はっ　！　！　と目を覚ました誠は文字通り飛び起きた。
力強く体を起こした所為で首筋が軋む。
ぼやけた視界にはニンマリ笑った雅紀の姿が映っていた。

「やっと起きたか」

「…ん……今何時だ…そろそろ2限が始まる時間か……？」
ぼぅーっとする頭を捻(ひね)りながら辺りを見回してみるが、生徒が一人も見当たらない。

「…2限って体育だったか？」

「何寝ぼけてんだよ。ほら、とっとと帰るぞ」

は？と訳もわからず時計を見ると短い針が12を指している。

――――昼？

「おい！なんでこんな腹の減る時間に起こしてんだよ！1限終わったら起こせって言ってあったろ！てかもう授業すら終わってんじゃねえか！！」

「ん？そうだったか？でもいいじゃんか。もう帰れるんだぜ」

「よくねえよ！いや、グッジョブ！それでいい！」
誠は怒っているのか喜んでいるのかわからないテンションで親指を立てる。
雅紀の皮肉スマイルは腹立たしいが、幸か不幸かこのまま帰ってゲームの続きができるのだから。

「よっっっし！即行で帰るぞ！」
生き返ったように立ち上がった誠は力いっぱい教室の引き戸を開けた。

いつもの調子で、帰り道の分岐点で雅紀と別れた誠は無意識のスキップで自宅に到着した。
彼の自宅は二階建ての一軒家。
現在、家には誰もいない。
両親は共に海外出張の為不在、短大生の姉は午後からの授業によりすれ違いで家を出たはず。
つまり、誠のプライベート空間を邪魔する者は誰もいない、という事だ。

誠は玄関の扉を開き、姉の靴を確認する。
姉がいつも履いている靴は見当たらない。
どうやら予想通りのようだ。
誠は誰かに見せつけるかのようなガッツポーズを決め、台所にあった炒飯を持って階段を駆け上がった。
高鳴る鼓動。
湧き上がる期待。
誠はこれまでした事のない爽やかさ全開の笑顔で自室の扉を開けた

――――

「やっと帰ってきたか」

「……は？」

そこには居るはずのない少女が床に座っていた。

この不可解な現状に思考が追いつかない誠は爽やかな笑顔のまま固まるしかなかった。

日本人形のようにまっすぐ伸びた艶（つや）やかな黒髪が異様に目立つ、誠と同い年くらいの彼女は足を崩して座り、散らかった部屋を物色している。

誠はこの少女を知らない。

見た事も聞いた事もない。

姉の友達か。

両親の隠し子か。

雅紀の嫌がらせか。

まさか、このなりで空き巣か。

誠は頭の中で様々な可能性を探ったが、どれも違うという結果に至った。

そんな誠を他所（よそ）に少女は容赦なく部屋にある物に手を伸ばす。

「しかし汚い部屋だな。何だこのゲームソフトとマンガ本の山は」

「いやいやいやいや！！平然とした表情で俺の部屋を観察してんじゃねぇ！！お前誰だよ！！どこから入りやがった！！」

「……」

「俺の存在を無視して物色を続行するんじゃねえよ　！　！　」

「帰ってきて早々、騒がしい奴だな」

少女は物色の手を止めたが、相変わらず目は合わせない。

「聞きたい事は山ほどあるが、とりあえずどこから入った　！　玄関に靴はなかったんだぞ　！　」

少女の口元がニヤリと歪んで、

「窓から」

「犯罪ですよ、あなた　！　！　」

「冗談も通じないのか。ちゃんと玄関から入った。ちゃんとお前の姉の許可も得た。靴はここにある」

そう言って、少女は結んであるカーテンの後ろからローファーを取り出した。

――――　なんだ、この温度差は。

早くも疲労感満載の誠は冷静さを取り戻そうと頭を冷やし始める。

「…そ、それで、お前は一体どこの誰の何様なんだ……ってあれ」

少しずつ周りが見えるようになってきた誠は彼女の服装が見慣れたものだという事に気がついた。

「それ、うちの制服だよな」

「それがどうした」

野暮な事を聞くなと言わんばかりの表情に対する怒りを抑えて誠は食い下がる。

「うちの学校の生徒なのか。見かけた事ないけど」

「当然だ。今日転校してきたんだからな。因(ちな)みにお前のクラス、２－Ｄだ」

その言葉に誠の頭の中が再び混乱し始める。

「ちょっと待て　！　俺のクラスに転校生だ　！　？　それも冗談なのか　！　？　」

「まあそうだろう。お前は朝からずっとナマケモノのように居睡(いねむ)りに耽(ふけ)っていたからな」

鼻で笑った少女は睨みつけるように漸く誠と目を合わせた。

「改めて自己紹介するとしよう。私の名は桑折(こおり)　杏(あんず)。お前を護衛する為に来た」

「ッ　！　！　」

「驚くのも無理はない。お前は今まで普通の生活を送ってきたのだからな」

桑折　杏はうんうんと頷いて誠の驚愕の表情に納得した。

だが、杏の言葉は誠の耳に届いてはいなかった。

この女、瞳が　――――

杏と目を合わせて初めて気がついた。
瞳の奥の色が真紅じゃない。
青色、正確にはアクアブルーの輝きを放った、見た事のない澄んだ瞳。
杏は自分がこの一週間で見てきた偽りの人間とは違った人種。
赤い瞳の人間が偽物なのだから、恐らく彼女は“本物”なのだろう。
誠の中にあった杏への警戒心がより一層強まった。

「どうした。護衛と聞いただけでいくらなんでも驚きすぎじゃないか」
やっと杏の言葉が耳に入ってきた。

「…あ、ああ……」
誠は彼女の青く光る瞳について聞こうとした。
が、言葉が喉元まできたところでそれを抑え込んだ。
彼女のような稀な人種にとってはごく普通の事で、きっと彼女の目にも当然のように自分と同じ色が映っているのだろうと考えたからだ。

「え、ええと……ご、護衛って何から護るんだよ。そこら辺にいるチンピラか？　極道絡みか？　まさか、警察とか言うんじゃないだろうな」

「残念ながらどれもはずれだ」
誠の冗談混じりの言葉は見事なまでに一蹴された。
杏は何から話せば良いかと言葉を選んで、

「…お前はこの世界の人間が2つの人種に別れている事を知ってい

るか」

その言葉に即座に反応した誠だったが、敢えてここは一般論を答えて探りを入れてみようと思い立ち、

「男と女、みたいなもんか　？　」

「そんな単純なものではないが、考え方は間違ってない」

杏は床から立ち上がり、窓辺に腰掛ける。

「この世には１から１０まで決められた道だけを歩み続ける“偽人”と歩む道を自分の意思で自由に変えることのできる“真人”がいる。簡単に言うと魂が有るか無いかの差だ。因みに私は勿論の事、お前も真人に類する。そうでなければ私がこの地を訪れた意味がないからな」

「どういう事だ」

「私が所属する部隊はお前のような無力で脳なしで１人では何もできない真人を保護している」

ひどい言われようだが、ツッコミで話の腰を折るのはやめようと拳を抑える誠。

「そういった部隊を“真人護衛部隊”、通称“真衛隊”という。真衛隊は実力者の真人が集い、同じ真人を“奴ら”から護るのが役目。そうする事でこの世界の均衡を保っている」

「……で、その奴らってのは」

「本題はそこだ。我々が存在する理由、それは真人を食い物としている輩(やから)が存在するからだ。その種族は様々。だがまあ、今のお前が最も気をつけるべき連中は一つだけでいい。奴らの組織名は“真人狩り”。生きた真人を喰らう腐り切った真人の集まりだ」

その言葉を聞いて、誠は頭の中で恐ろしい光景を想像してしまった。

「真人って人間の事だろ！　人間が人間を喰うなんてありえねえだろ！」

「喰らうというのは飽くまで比喩(ひゆ)だ。お前が考えている事ではない」しかし目標を気絶させて生気を吸い取るから結果的に殺すのは同じだがな、と更に具体的な表現を付け加えられ、より一層恐ろしい地獄絵図を想像してしまいそうになり、誠は慌てて頭を振った。

「だけど、そんな事して何になるっていうんだよ！」

「真人狩りには宗教のような、その中だけの決まり事があってな。奴らは真人の生気を吸い取れば自分の“力”がより高まると信じている。そんな馬鹿げた事があるはずがないというのに」

「力？」

杏の言葉にまた引っかかる。

真人のくせにそれすらもわからないのかと言わんばかりの呆れた表情の杏は軽い溜め息をついた。

「力というのはだな……いや、こればっかりは言葉で説明するよりも見せた方が早い」

見せるって何を？　と聞こうとした次の瞬間、誠の目に衝撃的な

光景が映り込んだ。

「……嘘…だろ……」

ピキピキ、とガラスにひびが入るような音。
見るだけで冷たさが伝わってくるほどの透き通った色彩。
雲丹(うに)の棘(とげ)のように鋭く尖(とが)った針の塊。
当人から説明を受けずとも何かわかる。
あれは紛れもなく氷だ。
氷が彼女の手の平の上でふわふわ浮いている。

あまりの衝撃に一歩退く誠を見て、何事もなく氷を出現させた杏が予想通りといった笑みを浮かべる。

「その表情からして本当に初めて見るようだな。これが我々のような優れた真人だけが持つ力。“能力(スキル)”だ」

「能力(スキル)…」
誠にとって能力(スキル)などというものはマンガやゲームの中だけのものだけだと思っていた。
現実では決してありえない、空想の世界の産物だと。
誠は超が付くほどのゲーム好き。
現実ではありえない特別な力に憧れた事もあった。
しかし、いざ目の前に出されるとそんな感情は一切生まれない。
生まれるのは恐怖という感情だけ。

そんな誠を他所に、杏は平然と話を続ける。

「言っておくが、お前を狙う真人狩りも大半が能力(スキル)を使えるんだ。
こんな些細(ささい)な事でいちいち驚いていたら身が持たないぞ」

「お、驚くに決まってんだろ　！　手から氷だぞ　！　そんなもんはゲームの中だけに……はっ　！　まさかゲームのやりすぎで幻覚を　！　」

「あからさまな現実逃避で私から目を逸らすな」
杏は浮いている針状の氷を難無く砕き割った。
粉々に飛び散った氷の破片が誠の足元に当たる。

「とにかく、真人狩りには気をつけろ。少しでも違和感のある人間を見かけたら即座に走れ。私もできる限り護衛に尽くすが、万が一の事もある。そうならない為にもできるだけ遠くへ逃げろ。でなければ、死ぬぞ」

誠の背筋に寒気が走った。
たった今見た氷よりも冷たく感じる杏の言葉。
プレッシャーという名の重石（おもし）が誠の心にズシリと伸し掛かる。

どうやら白羽　誠の平穏な日常は本当に終わってしまったらしい。

立派な戸建てが立ち並ぶ住宅街。
その家々の隙間にできる狭くて薄暗い人目につかないような路地裏。
そんな場所で男が一人電話を掛けていた。
男の名は高科（たかしな）　力（りき）。
寝起きのようなボサボサの髪、2メートル近くある長身、岩のようにゴツゴツした筋肉、片方の鼻翼（びよく）にぶら下がっている輪状のピアスと目立たない路地に全く溶け込めていない格好の高科はそんな事など気にも留めずに電話越しから聴こえる声に集中する。

『どうしましたか、高科さん。今回の標的の資料は既に渡してあるはずですが』

「どうしたもこうしたもあるか　！　この資料、町名が書いてあるだけで詳しい住所が載ってねえじゃねえかよぉ　！　」
片手に持っている紙を見ながら電話に怒鳴る高科。
対して、電話の相手は冷静に対応する。

『それくらいは自分で探してください。仮にもプロでしょう。それに目的地が都会ならまだしもそこは田舎の中の田舎。人口だって少ないんですから』

「…ちっ、ならせめてこの標的が通う学校くらいは教えろや。標的もろともぶっ潰してやるからよ」

『いいですけど、忘れないでくださいよ。標的を殺してしまえば生気は吸い取れません』

「わかっとるわ。死なない程度にぶっ潰す」

高科は学校名を聞き出すとすぐさま携帯電話をポケットにしまい、

薄暗い路地裏を出た。
その足取りは競歩の代表選手の如く、通りを歩いている人々をどんどん追い抜いていく。
しかし、それは焦っているからではない。
一刻も早く標的を潰したくてうずうずしているのだ。
高科は指の骨を鳴らしながら、不敵な笑みで呟く。

「……早く、喰らいてえなぁ……」

――――　これは、拷問だろうか。

当の誠は勿論、この状況を見た人は皆こう思うだろう。
誠は今テレビゲームをしている。
それも大事なボス戦だ。
それを真後ろで初対面の女性が真剣な表情で見ている。
しかも無言で。

（……気まずい。気まずすぎる……）
誠の額に嫌な汗が滲(にじ)む。
チラリと後ろを振り向き、初対面の女性・杏の様子を覗(うかが)うと彼女は

誠の所有物であるベッドに腰掛けて足をブラブラさせている。
誠が振り向いても気にも留めずにテレビ画面をじーっと見ている。
ならば外へ逃げればいいのではと第三者は言うだろう。
だが、それは無理だ。
何故なら、杏が外出禁止令を誠に命じたからだ。
なんでもこの町に真人狩りが訪れるとの情報を得たらしい。
一体何様なんだ、と誠は愚痴を垂らしたが、自分を狙う危険人物がウヨウヨいる外と多少苦痛ではあるが平和な時間が続く内とではどちらが安全かなど素人の誠にだってわかる。

と、テレビ画面から人を小馬鹿にしたような音が流れた。
見ると画面上にＧＡＭＥ　ＯＶＥＲという文字が大きく表示されている。
これで７度目。
全然集中できていない。
それもそのはず、杏が後ろで見ている上に、衝撃的な事実を叩きつけられた直後だ。
まともな心境でゲームなどできる訳がない。
しかし、やらなければ間が持たない、と半強制的な状況に陥(おちい)っているという訳だ。

「どうした。さっきからやられっぱなしじゃないか」
誠の気も知らずに、杏が皮肉をぶつけてくる。

「……ああ　！　！　もう　！　！　やめだぁ　！　！」
耐えきれなくなった誠は持っていたコントローラーを投げ捨てて勢いよく立ち上がった。

「どこへ行く」

そんな誠を冷静に止める杏。

「…トイレだよ」

「とか言いつつ、外に逃げるつもりなのだろ」
全てお見通しのようだ。

「い、いいだろ少しくらい　！　大丈夫だって　！　そんなピンポイントで敵と遭遇するはずがねえんだからよ」

「駄目だ」
即答だった。
けれど、ここで諦めれば二度と外へは出れないと悟った誠は懸命に食い下がる。

「心配すんな。もし敵が周りの人に紛れててもその中から“青い瞳”の奴を探せばすぐに発見できる。そん時は猛ダッシュで逃げるからよ」

「真人狩りただ闇雲に走って切り抜けられるような輩（やから）では……ってちょっと待て。何の話だ」
話題が唐突に切り替わる。

「青い瞳　？　なんだそれは」

予想外の返答に、誠の眉が微かに動く。

「え…何って青く光る目だよ。お前も真人か偽人かを見分ける時は瞳の色で判断してるだろ」

「瞳の色　？　それは比喩か何かか。だとすると中々の例えだな。相手の目の動きで敵かどうかを判断する、という事か」

「そんなんじゃねえって　！　なんでわかんねえんだよ　！　大体、お前が俺の家に居たのだって教室で俺を見た時に瞳が青かったからじゃないのか　！　」

「お前の情報は全て配布された資料で確認した。当然、顔も住所もだ。第一、私は学校でお前と顔を合わせてないぞ。お前がずっと顔を伏せていた所為でな」

「じゃあなんで俺だけに……ッ　！　！　」

そこで漸く気づいた。
更なる衝撃の事実に。

――――――――――　俺だけ、なのか。

今目の前にいる桑折　杏にはこの色が見えていない。
目が合えばはっきりと見える青みがかった瞳の色が。
他の真人が皆見えないのかはわからない。
何せ桑折　杏以外に会った事がないのだから。
しかし、真衛隊という特殊な部隊に所属していて、その上、妙な力を使う彼女に見えないのなら他の者も同等に見えないのではないのか。

自分の目だけに彩られる紅（あか）と蒼（あお）。
自分だけに宿った力。

誠は先ほど見せつけられた氷の能力(スキル)を思い出す。
これが自分の能力(スキル)なのか、彼自身に自覚はない。
いや、能力(スキル)を扱う者にとってはこれが普通なのか。
誠がしばしの間、考えに耽(ふけ)っていると彼の様子に気がついた杏が真剣な口調で言う。

「もしお前の言っている事が本当ならそれがお前の力なのかもな。資料にはなかったが」
杏の考えも誠と同じものらしい。

「情報部のミスか。それともすれ違いで情報を受け取ってしまったか。どちらにしろ後で情報部に確認した方がよさそうだな。その力が覚醒した日時、場所、その時の状況を教えろ」

杏の偉そうな態度に少々不満を抱きつつ、誠は渋々答える。

「え…と、日にちは1週間前、場所は…朝起きたらこうなってたからここだ。状況は……朝起きたら真人になってて、なんていうか…こう頭の中がはっきりとしてて…」
誠はその時の事をできるだけ的確に伝えたつもりだった。
けれど、それを聞いた杏の表情が強張る。

「…今、なんて言った」

「あ、わかりづらかったよな。んー…もっと簡潔に言うとだな…」

「…朝起きたら真人になってた、だと…」

「え、あ、ああ」

すると、誠の説明もまだ途中だというのに、杏は少し焦った手つきでポケットから携帯電話を取り出すと誰かに電話を掛けた。

「…私だ。護衛部隊・桑折　杏だ。至急、アルヴィリー部隊長を出せ。大至急だ　！　」

どうやら先ほど後で掛けると言っていた情報部とやらに電話しているようだ。

これは千載一遇の大チャンス。

この異様な空気の自室から脱出するには今この瞬間しかない。

電話の相手を待っている杏が視線を外すや否や、誠は背を向け走り出した。

「　！　？　待てっ　！　！　」

だが、誠は止まらない。

階段を駆け下り、2秒で靴を履き、玄関を飛び出し、

「待てと言っているのがわからないのか」

桑折　杏に行く手を阻まれた。

何故、彼女の靴が部屋の窓辺にあったのか理由は聞かなかったが、ここへ来て漸く理解できた。

2階の部屋の窓から躊躇（ちゅうちょ）なく飛び降りのだ。

受話器に耳を当てたまま華麗に着地した杏は、杏と2階の窓を交互に確認する誠を鋭い目つきで睨みつける。

「外出は禁止だと言っただろ。お前は死ににに行くつもりか」

「ち、違うわ　！　外の空気を吸うついでに近くの商店街にでも行くんだよ　！」

叫んで間もなく、誠は杏が阻んでいるのと逆の方向へ再び走り出した。

つられて杏も走り出す。

ここは誠が知り尽くしている土地。

例え、相手が能力（スキル）の使い手で護衛のプロだとしても逃げるだけならこっちにも分（ぶ）がある。

誠は細く入り組んだ路地裏を全力で駆け抜けた。

桑折　杏という名の追手から逃れる為に。

「ちっ、奴は馬鹿か。あれほど外は危険だと言い聞かせたというのに」

護衛対象である白羽（しらは）　誠（まこと）に撒（ま）かれた杏は仕方なく辺りを捜索していた。

初日からこれでは先が思いやられる。

と、耳を当てていた受話器から漸く相手の声が聞こえてきた。

『ハ～イ、ご指名ありがとうございま～す。リーナ・アルヴィリーで～す』
テンションの高い女性が酔っ払い口調で名乗る。
「アルヴィリー隊長。桑折（こおり）です」
『あら～杏ちゃんじゃない。ってもう、リーナって呼んでって言ってるのに～』
そんな軽い調子のリーナとは打って変わって、杏は深刻な口調で話し始める。
「先日、アルヴィリー隊長が提供してくださった情報に誤りがあって電話しました」
『え～誤りぃ～　？　』
「ええ。今回の護衛対象である白羽　誠は無能力者（ゼネラル）だと聞いていました。しかし、彼は自分が能力を使えると言ってきました。これはどういう事ですか」
ちょっと待ってね～、と白羽　誠のデータを探っているのかカタカタとキーボードを打つ音が聴こえる。
『ん～でも彼が力を使ったっていう経歴はないわね。真の力を使えば必ず形跡が残るはずだもの』
「では奴が言う力は何だというのですか　！　まさか、真の力ではないとでも　！　」

返答に困っているリーナの声を聞いて、自分が無意識に声を張り上げている事に気がついた。
杏は息を整えて、
「すみません。ですが、理解できない点がもう一つありまして」
『まだあるの～　？　』
「彼は以前まで偽人で一週間前に何の前触れもなく真人になったと…」
その言葉に電話越しに聴こえていたキーボード音が止まる。
『それって、有り得ないわよね～。いつまで経っても真人は真人、偽人は偽人。例外はないもの～』
「私もそう思いました。…やはり、彼が言う事には耳を貸さない方がいいのでしょうか」
『ん～…とりあえず、杏ちゃんのとこの隊長さんに相談してみたら？　彼ならきっとデータにない事も知ってるわよ』
「…わかりました。急な電話で失礼しました」
バイバ～イ、と終始酔っ払い口調だったリーナとの通話を終了し、杏は護衛対象の捜索に戻る。
未だ逃亡中の謎の少年・白羽　誠の捜索に。

薄暗い路地裏を駆け抜ける誠は、杏が後ろから追いかけてこない事を確認すると速度を緩めながら辺りを見回す。
この路地裏は自宅からかなり離れた場所。
しかし、安心はできない。
相手は真衛隊と名乗る護衛部隊（よくは知らないが）だ。
妙な力を使うは、２階から飛び降りるはで油断できない存在だ。
挙動不審、疑心暗鬼。
その言葉は今の誠にぴったりだった。

路地裏から顔を出し、次の逃走ルートを確認すると再び全力で走り出す。

（ここを抜ければ商店街に出る。そこで人混みに紛れたり、店の中に隠れればやり過ごせる）
次の一手、更に次の一手と考えて走っていた誠はちゃんと前を見ていなかった。

「（奴を撒いた後はゲーセンに……フヒヒ）ヒグォッ　！　！　？」
ドンッ、と顔面に衝撃が走り、壁に投げたボールのように体が跳ね返り、地面に弾んだ。
当たった感触からコンクリートでできた壁かと思ったが、前を見ると筋肉質の大男が立っていた。

「痛たた…すいません」
「気をつけろよ。ちゃんと前見て…ッ　！　！」
「ッ　！　？　」
互いに目が合った瞬間、二人共々顔色が一変する。
（こ、この大男、瞳が青い　！　！　）
誠から見た大男の瞳は杏のと同様に青く光っている。
（こいつも俺や桑折（こおり）と同じ真人　！　！　って事は…敵　！　？
…いや、もしかしたら桑折のような味方かも）
だが、誠の思考とは裏腹に大男はニヤリと顔を歪ませる。
それは明らかに善人とは懸（か）け離れたものだった。
（ま、まずい　！　逃げなきゃ…）
急いで体を起こした誠は敵と認識した大男に背を向けて元来た道へ走り出した。
転び掛けても、足が震えても、決して立ち止まらない。
そう。
それはまるで肉食動物への恐怖心に駆られた草食動物のように　―
―――
そして、それを見た肉食動物は獲物に狙いを定める。
「今日の俺は運がいい。馬鹿な標的が目の前にのこのこ現れてくれたお陰で、学校を潰す手間が省けたんだからな　！　！　」
大男が、既に３０メートルほど離れた地点まで逃げている標的に向かって吠える。

「逃がすかよ　！　！」

誠が大声に驚いて後ろを振り返ると、大男が傍(そば)にあった“ある物”を軽々と持ち上げている。

“ある物”、それは　――――――――

「ええええっ　！　！　？　あんなのありかよっ　！　！」

乗用車だ。

通りに駐車してあった何でもないごく普通の車。

筋肉質の大男はその車の前に付いているバンパーを掴んでダンベルのように持ち上げている。

その思わぬ光景を目の当たりにした誠の頭の中に更なる恐怖心が芽生える。

これは先に桑折　杏に感じたのと同じものだ。

そんな怯える誠目掛けて、大男はそのまま乗用車をぶん投げた。

「う、うおおおおおあああああ　！　！」

ズゴンッ、と宙を舞った乗用車が誠のすぐ後ろに落下した。

その衝撃で誠は頭から派手に転げる。

直後、地面を抉(えぐ)った乗用車が爆発を起こす。

誠の体は爆風で吹っ飛び、通りを挟んでいたコンクリート製のブロック塀が跡形もなく粉砕された。

周りの物全てを巻き込んだ当の乗用車も黒焦げになり、炎上している。

誠は爆風で飛ばされたものの、もしあの場で転がっていなかったら今頃は爆撃に巻き込まれてあの乗用車のように黒焦げになっていた

だろう。

全身に激しい痛みが走る。
それでも無理やりに倒れた体を起こそうとしたが、頭で考えても体が言う事を聞かない。
全身を襲う激痛と悪寒。
震えの止まらない手足。
重くなった頭を上げると、爆煙の合間から大男が第二投目を行おうと幅5メートルほどのブロック塀を丸々引き剥がして持ち上げている。

――――　俺、ここで死ぬのか。

もはや、今の誠の脳に逃げるという思考は残されていなかった。
あるのは、絶望と後悔だけ。

（俺が部屋から出なければ。俺が桑折の助言をちゃんと聞いていれば。…俺が、真人じゃなければ）

そんな中、大男の第二投目が放たれる。
平たいブロックの塊が自分の方へ弧を描いて飛んでくる。
先ほどの乗用車のような爆発はないにしろ、あのブロック塀に潰されれば一溜まりもない。
誠は目を瞑（つむ）る。
自分が死ぬ瞬間の光景なんて見たくない。
誠はもう待つしかない。
恐らく、自分の命が尽きているだろう数秒後を。

と、手にひんやりとした感触があった。
これはついさっき感じたものと同じ。
いや、それよりももっと冷たい。

覚えのある感触に閉じ切っていた瞼(まぶた)を勢いよく開く。
すると、自分が倒れている位置の真ん前、自分とブロック塀を隔てるように立ちはだかる何か。

「……氷…と…　？　」

目の前には2メートルを超える氷の壁と人影があった。
その見覚えのある人影はこちらを振り返り、こう言った。

「人の言う事に従わない奴は邪魔だ。退(の)いてろ」

「　！　！　桑折　！　！　お前、どうしてここがあああ　！　？　」

杏は誠の問い掛けに蹴りで答えた。
その一発で誠は数メートル飛ばされた。

そして、これ以上何も語らない杏は飛んでくるブロック塀を睨みつける。
ブロック塀はもう目と鼻の先。
杏は自分が作り出した氷の壁でブロック塀を受け止めるつもりだ。
そして、

二つの壁はぶつかった。
ズバリィィィン、と。
石と氷の砕ける音が響き、互いに砕け散った。
だが、ブロック塀の勢いは止まらず、残骸が杏に降り掛かる。
後退させる時間さえ与えない。

「ッ　！　！　」
体の数ヶ所に残骸がぶち当たる。
細くて小柄な女性の体にはとても耐え切れないほどの損傷だった、
が、杏はそれでも倒れない。

「桑折　！　！　」
見るに堪えない光景に思わず叫ぶ誠。
その声を聞いた杏は振り返りもせずに倒れたままの誠に言い放つ。

「…お前……いつまでそうしているつもりだ…」
杏の声からは彼女の辛さが滲(にじ)み出ている。

「…敵に遭遇したら…猛ダッシュで逃げるんじゃなかったのか…。
そうすると決めたから…お前は…家から出たんじゃないのか……」

「…けど、お前が…」

「私を嘗(な)めているのか、貴様はぁ　！　！　」

「　！　？　」

「私を誰だと思っている　！　！　真人護衛部隊の桑折　杏だぞ
！　！　指定された護衛対象は必ず護る　！　！　必ずだ　！　！
例え、この身が朽ちようとも、貴様が死を受け入れようとも、意

地でも護り抜く　！　！　これが私の、我々真衛隊の信念だ　！
！」
柄にもない杏の怒鳴り声は誠の心にズシリと重く伸し掛かる。
先ほどまでの自分の軽はずみな言動を思い返し、そして後悔の念が
涙となって溢れ出す。

「辛いか　！　悔しいか　！　死にたくないか　！　！　ならば、
起きろ　！　！　走れ　！　！　その腐り切った瞳で希望の光を見
い出せ　！　！」

誠は涙を拭い、顔を上げる。
その表情からは絶望も後悔も消えていた。
周りも見える。
手足も動く。
杏の言葉に力を貰ったのか、それともただ激痛で感覚が麻痺してい
るのか、理由はわからない。
けれど、今なら動く。
胸の奥に宿った熱い何かが誠の体を押し上げた。

「行けっ　！　！」

杏の掛け声と同時に、誠は駆け出した。
生きる為に。

第1章／変わる日常、変わる景色　後編

誠の足音が聴こえなくなるまで険しい表情だった杏は軽く息を吐いて肩の力を抜く。
頭、腕、足から真っ赤な血が滴る。
力を抜いた事で、より一層痛みが増す。
だがしかし、痛いなどと弱音を吐いている時ではない。
彼女にはやるべき事がある。
それは　――――

「おいおい、何ひとの獲物、逃がしてくれてんだ、ぁあ　？　」

眼前に存在する敵を抹殺する事。

爆煙の中から現れた大男は恐らく自分と同じく能力（スキル）を使う。
でなければ、あんなに大きなブロック塀をいとも簡単に投げるなど常人には不可能だ。
つまり、奴の力は、

「怪力、か」

「ま、近いかもな。けど、それがどうした。テメエの氷で止めてみるかぁ　？　」
大男はその太い足で氷の壁の残骸を踏み砕く。

「お前、さっき真人護衛部隊とか言ってたな。知ってるぜ、確か、生気を吸い取られる以外全く使えない真人のお守（も）りをする組織だっ

たか。中にはマシな実力者もいるらしいが、ほとんどはお前みたいなクズなんだろ」

「言葉は選んだ方がいいぞ。その減らず口を氷漬けにされたくなければな」

「クズにクズと言って何が悪い。現にお前はあの餓鬼(がき)が死の直前まで追い込まれても逃がすことしかできねえ能無しなんだからよ」

それを聞いた杏の顔からは何故か笑みが零(こぼ)れる。

「…そうだな。確かに、私は能無しかもしれない」

けどな、と杏は無意識に拳に力を込める。

「お前のような、何でもないただの一般人を食い物にしているクズよりはずっとマシだ。その腐り切った根性ごと水の結晶にしてくれる」

「…ほう」

大男は杏から目を離し、道脇に立っている電柱に手を掛ける。

ズンッ、と電柱がコンクリートの地面から引っこ抜かれ、他の電柱と繋がっていた電線がブチブチと次々に切れていく。

それを両手で掴み直した大男は棍棒のように振り回す。

「今のお前にそれができるのか　？　もう立ってるのがやっとなんじゃねえのか」

大男の言うとおり。

既に出血している右腕と左足は使い物にならない。

その上、頭がぼぅーっとして視界もぼやける。

度々途切れそうになる意識をなんとか繋いで立っている。
まともに戦うなど不可能に近い。
だがそれでも、杏の気持ちは曲がらない。

「かかってこい、クズ野郎」

大男は歯を剥き出しにして笑う。
そして、高々と掲げた電柱を、杏目掛けて力いっぱい振り下ろした。

どのくらい走っただろうか。
どのくらいの時間が経過しただろうか。
無我夢中だった所為か、よく知っている土地のはずなのにどこを走っているのかわからない。
杏は無事なのか。
あの大男は追いかけてきているのか。
様々な事柄が頭を過ぎる。

とその時、見慣れた景色が視界に入ってくる。
ここは、

「……商店街……？」

古くからあるこの商店街は長い年月が経った今でも昔のままの色や匂いが残されている。
いわば、大人の故郷。
そして今も穏やかでどこか懐かしい雰囲気を漂わせており、誠の心境とは全くの別物だった。

漸く土地感覚が戻ってきた誠はゆっくりと足を止めた。
拭っても拭っても噴き出る汗。
いつまで経っても整わない呼吸。
ほとんど感覚のない両足。

（これからどうするか。…とりあえず、予定通りどこかの店に隠れるとかしてやり過ごそう）
なるべく人が多い店に入りたいなどと考えていた誠は背後から近寄る気配に気づかなかった。
誰かが誠の肩に触れる。

「ッ　！　！　」
驚いた誠は振り返るなり身構えた。
が、そこには意外な人物が立っていた。

「ど、どうしたのよ、誠」

「あ、朱美（あけみ）　！　！　」

見覚えがありすぎる顔と見飽きている派手な赤髪でひと目見れば誰だかすぐにわかる。
幼馴染みの北条（ほうじょう）　朱美だった。
見ると、彼女は片手を伸ばしたまま誠の反応に驚いて固まってしま

っている。
誠はそこで初めて彼女が自分の肩に手を置いたのだと気がついた。
「そんなに焦って何かあったの　？　…っていうかあんたボロボロじゃない　！　」
朱美は誠の所々擦り切れた制服と汚れた顔を見て叫んだ。
幸い、制服の袖や裾に隠れて体の傷は見つからなかった。

「はは、ちょっとそこで転んじまってな」
誠は笑って誤魔化(ごまか)した。
杏の説明からいくと彼女も偽人。
今起きている争いには関与していない。
だから、真人狩りと出くわした事など絶対に口にはしない。
彼女を巻き込む事だけは何としてでも避けたいからだ。

「お前こそ、こんなとこで何してんだよ」

「何って商店街なんだから買い物に決まってるでしょ。本を買いに来たのよ」
そう言って、朱美はすぐ先にある小じんまりした本屋を指差した。

「そ、そっか。じゃあ俺、急いでるから」
ちょっと　！　、と呼び止める朱美をわざと無視して、他に隠れられる店を探した。

暫く商店街を行き来した結果、打って付けの店を発見した。
5階建ての百貨店。
ここなら人も多いし、仮に大男が誠の入った店を知っていても1階から5階まで隈(くま)なく探さなければならなくなる。
あわよくば、その隙をついて他の場所に逃げる事も可能になる。

ここだ　！　、と勢いづいた誠は大男が周囲にいない事を確認すると足早に百貨店へと潜り込んだ。
入口の様子がぎりぎり覗える１階の奥深くに身を潜めた誠はそこで漸くほっと胸を撫で下ろす。
しかし、まだ安心はできない。
奴を完全に撒くか、杏からの報告が来るまでは。

２０分が過ぎた。
大男の姿はまだ現れていない。
誠の中で薄れていた希望が徐々に膨らんでいく。
（……桑折（こおり）が……勝った……そう考えていいのか……）

その時、

ズザァアンッ　！　！　、と上の階の方から何かがぶつかる音とガラスの割れる音、それと人の叫び声が聴こえた。
大勢の客が階段を使って次々に降りてくるのが見える。
誠が現状を把握する前にまた同じような轟音が響く。
しかも今度のは先の音よりも近い。

「　！　！　まさかっ　！　！　」
誠は慌てて立ち上がり、彼よりも現状を把握できていない客達を押し退け、そして店から出るなり真上を見上げる。

「くっそ　！　！　やっぱりか　！　！　」

そこには誠の予想通りの絵図らがあった。
今まで誠が居た百貨店の5階と4階に電灯が突き刺さっている。
これを見た部外者は何が起きたのかさっぱりわからないだろうが、
当人の誠にはわかる。
こんな常人離れした事を仕出かすのは奴しかいない。

「よう。また会ったな」
わざとらしく挨拶が前方から聴こえてくる。

「お前…」
誠の目の前には3本目の電灯を持っているあの大男がいた。
こんな正確に誠の位置を把握していたということは、きっと誠の体に発信器でも付いているのだろう。
けれど、初めに遭遇した時とは明らかに違う箇所があった。
腕が凍っている。
大男の左上半身を覆うように氷の塊が引っ付いている。
あれは確かに杏の爪痕(つめあと)だ。
ということは　――――

「桑折…」

「ああ、あの女か。あいつなら今頃さっきの通りで肉塊になってるぜ」

「ッ　！　！　」

「そうカリカリすんなよ。あいつはよくやった。少なくとも、俺が期待した以上の事をやってくれたぜ。何せ俺の左腕をこんなにしちまったんだからよぉ」
大男は笑いながら、持っていた電灯で固まった左腕部分をコンコン

と叩く。

「あの女にはクズだの能無しだのと悪い事言っちまったなぁ。もし奴が万全の状態だったら俺に勝ててたかもしんねえもんなぁ。そうだ。本当にクズなのはあの女じゃねえ。お前だ」

両手が塞がっている大男は顎で誠を指す。

「お前さえいなけりゃあ女は死なずに済んだんだぜ。お前さえいなけりゃなあ！！」

「…ってんだよ…」

「ぁあ？」

「わかってんだよそんな事は！俺がいなければ町も壊れなかったし、百貨店の客も怯える事はなかったし、桑折がお前みたいな奴に負ける事だってなかった！そんな事は自分でも十分にわかり切ってんだよ、クソッたれ！！」

その言葉で更に笑う大男。

「だったらなんだってんだ。男らしく敵討ちでもしてみるか？」

「…他に手がないってんなら、やってやるよ、敵討ち」

誠の言葉に迷いはない。

「ここで拳を振るわないで、いつ振るえってんだよ！！」

下手に逃げ隠れすれば無関係の一般人が巻き添えを食う。

また自ら死を受け入れれば杏の覚悟が無駄になる。

ならば、戦うしかないのだ。
鉢合わせた時と違った言動を見せる誠に感化された大男の表情からはいつの間にか笑いが消えていた。
「そんなに俺と戦いたいのか。いいぜ。けど、そういう嘗(な)めた発言はこいつを喰らってからにするんだな　！　！　」
突如、戦いの火蓋は切って落とされた。
片手に握られていた４メートル強の電灯が槍のように真っ直ぐ投げられる。
以前に、乗用車が投げられる光景を目の当たりにしていた誠はあの電柱が自分に投げられるのだろうと予(あらかじ)めかわす体勢をとっていた。
にも関わらず、飛んできた電柱が当たるぎりぎりのところで、漸く誠は震える足を無理やり動かして横へ跳んだ。
直前まで誠が立っていた地面に電柱が突き刺さる。
全身を寒気が襲うが、恐怖を感じる間さえ大男は与えてはくれない。
更なる追撃を喰らわせようと、次に投げる物を探す大男。
その無防備な敵を前に、今しかないと誠は力強く一歩踏み出し、前進した。
敵は怪力。
一撃を喰らえば一溜まりもない。
けれど、奴が隙だらけなのはこの瞬間だけ。
そこを攻めねば勝機はない。
「うぉぉぉおおおおおおおおおおおおおお　！　！　」
誠は右拳に力を込めて思いっきり振り放つ。
だが。

「届かねえぞ、そんな安いパンチ」

パシン、という軽い音と共に、全身全霊で放った一撃は易々と敵の片手に止められてしまう。

「どうした、震えが止まんねえのか。そんなんでよく敵討ちなんぞほざけたもんだな、ぁあ　！　？　」

左手が使えない大男は誠の右拳を払い除け、そして、すぐさま右拳を振るった。

ズドンッ、と誠の腹部に強烈なボディブローが入る。

「ぐ…があああああああ　！　！　！　」

衝撃と激痛で誠の体は遥か後方へ吹っ飛んだ。

アスファルトの地面に弾み、店の壁に激突したところで漸く勢いが止まる。

途端に口から多量の血が噴き出る。

――――　畜生（ちくしょう）。やっぱり、俺には無理なのか。

消し去ったはずの弱気が再び心を包み込もうとした、

その時だ。

誠の頭の中で、ある疑問が生まれた。

（…なんで…この程度で済んだんだ…　？　）

確かに、殴られた腹部には今も尚、激痛が走っている。

しかし、それだけだ。

奴は怪力の持ち主のはず。

それならば、骨が砕けたり内臓が潰れたりしても不思議ではない。

なのに何故。

（――――ッ！？）

そして、その疑問は“ある物”の存在により、確信に近づく。

それは、氷だ。

大男の上半身の左側を封じている氷。

あれは桑折がやったものだろう。

その爪痕が“何故今も残っているのだろうか”。

あの大男から見れば、誠の存在は非常に小さなもの。

片手だけでも十分に潰せると思っているだろう。

それでも、動きを制御している氷をわざわざ残しておく意味などない。

では、“何故その氷を自慢の怪力で砕かないのだろう”。

（…違う。砕かないんじゃない。“砕けない”んだ）

あの氷が異常なまでに固いのかもしれない。

たった今喰らった一撃だって奴が手を抜いた可能性もある。

駄目だ。

まだ奴が１００パーセント怪力でないとは言い切れない。

しかし、それなら、

（鎌でも掛けて、直接聞き出すまでだ！）

大男が次なる電灯を引き抜いた頃に、誠は動く。

「あーあ、つまんねえよ、お前」

「ぁあ　？　」
明らかに先ほどまでとは違う口調に、大男は僅かに眉をひそめる。
「せっかくこっちが肉弾戦で勝負しようと素手で殴りに行ってるってのに、まだそんなもん持ってやんのかよ。いい加減、もっと面白くしようぜ」

安い挑発。
だが、これまでの大男の性格上、乗ってくる確率は高い。
対する大男の答えは、

「悪いが、却下だなぁ。今の一撃はお前が殴り掛かってきたから反射的に殴った。が、俺の本来の戦い方はこっちだ。どうしても肉弾戦がしたいってんなら、もう一度突っ込んでくるこったな。…まあ、それができたらの話だがなぁ　！　」

――――　やっぱり、断ったか。

これで確定した。
奴は怪力じゃない。
となると、接近戦なら勝機はある。
活路は見えた。
あとは勇気を振り絞るだけ。

一瞬たりとも止まらなかった体の震えが自然と治まる。
口から滴る血を拭い、誠は立ち上がり、

「…できるさ。俺は、負けない」
真っ直ぐに前を向く。

「いいね。いいね　！　いいね　！　！　そう来なくちゃあ、生気の吸い我意がねえってもんだぜぇ　！　！　」

再び、電灯という名の槍が放たれる。
誠も今度はぎりぎりではなく、余裕を持ってそれをかわす。
右へ、左へ、大男の投げる様々な物体が飛び、右へ、左へ、誠がかわす。
投げる。
飛ぶ。
かわす。
ただただ、それの繰り返し。
足元を震わす衝撃と耳を劈く轟音だけが辺りに響く。
横へ跳ぶだけの誠は前へは出ない。

「おらおらどうしたよ　！　！　威勢がいいのは口だけかぁ　！　？　それとも、やっぱお前は逃げる事しかできねえのかよぉ　！　！　」

それでも誠の心境が揺らぐ事はない。
そう。
誠は何の目的もなしに動いている訳ではない。
大男との距離を一気に詰めるタイミングを見計らっているのだ。

そして、その時は訪れる。

「ッ　！　！　？　」
突然、大男の武器である大きな物体が飛んでこなくなり、鳴り続いていた轟音が途絶える。
それとほぼ同時に大男の顔が俄かに歪む。

見ると、電灯、看板、自転車などが全て投げ終わり、彼の周りには何一つ残っていない。
瞬間、この機を待っていたとばかりに誠が前に出た。
一直線に走り、大男との距離を一気に詰める。

「ちっ、させるかよぉ　！」
大男は周りの物体を諦め、しゃがみこんで片手で地に触れた。
ブロック製のアスファルトの縁に指を引っ掛けると忽ちに地面にひびが入り、それを切れ目に、バリバリバリッ、と地面が剥がれていく。

「おらあああああ　！　！」
そして、大男の唸り声と共に、瞬く間に周囲一帯のコンクリートが引き剥がされて掬うように投げられる。

「お、おわっと　！　？」
不意に足元が浮き上がり、バランスを崩した誠は持ち上げられた地面ごと宙を舞った。

（さっきの自信はこの奥の手から来てたのか。…いいぜ。そこまでして接近戦に持ち込ませない気なら…　！　！）
誠は空中でバランスを取り、同じく宙を舞うコンクリートの塊を足場にして真下にいる大男まで駆け下りる。
重力に逆らわない事で通常の走りよりも加速する。

「馬鹿なっ　！　？　こいつ、さっきまでと動きが…　！　！」

「当たり前だ。俺はもう頭を冷やしたんだ。お前の動きも周囲の状況も丸見えなんだよ　！　！」
誠は歯を食いしばって拳を振り上げる。

「くそっ　！　！　」
誠の気迫に押されたのか、大男は数歩後ろへ下がる。
「その動きも予想通りだぜ　！　」
拳を振りかぶった誠はその状態を保ったまま片足で地面に着地し、もう片方の足で前へと更に突き進む。
「こ、来いやこらぁ　！　また壁まで吹っ飛ばしてやらぁ　！　」
大男も体勢を低くして拳を突き出した。
しかし、
「なっ　！　？　」
誠の顔面に当たる寸前で空を切る。
がら空きになる大男の懐。
互いの距離はほぼ零に。
そこへ、
「俺はこの一発に、お前の所為で俺の中に生まれた絶望と後悔の全てを籠(こ)める。嫌なら歯でも食いしばるんだな　！　！　」
誠の心に積っていた暗い感情が拳という形で大男の顔面に鋭く突き刺さった。
「が…はあああああああああああ　！　！　」
違いは震えているか否かの差だけ。
にも拘(かかわ)らず、先のとはまるで違う重たい拳。

自分の力に傲(おご)り、誠の力を甘く見た大男には痛い一撃だろう。
頬を抉られた大男は倒れ掛けた体を両足で支え、なんとか体勢を維持する。

そこに更なる追撃をと、誠が腹部に蹴りを放つ。
だが、

「ッ　！　？　」
寸前で受け止められる。
両者の動きが止まるや否や、上に放られっぱなしだったコンクリートの塊が音を立てて近くの店の屋根に落下した。

「……っころす……」
大男の口から物騒な呟きが聴こえた。

「ぶっっっ殺す！！」
誠を見ていた目つきが変わる。
睨まれた誠は握られている足を振り解こうと足を動かすが、変な体勢の所為か思うように力が入らない。

「おおおおおおおおおおお　！　！　！　」

「おおおおおおおおおおおおお　！　！　？　」

持たれた足ごと思い切りぶん投げられ、今度は別の店のショーウィンドーまで吹っ飛ばされた。
衝撃で窓にひびが入る。

「痛てて…なんだ、急に…」

「テメエは俺のプライドを傷つけた。テメエみてえなクズがだ。…許さねぇ。許さねえ　！　許さねえ　！　！　絶対に許さねえぞおおおお　！　！　！　」

耳が痛くなるほどの雄叫(おたけ)びだが、誠が臆す事はない。
自分の攻撃が奴に効いているのだ。
そうとわかればまだまだ攻められる。

勝利への兆しを感じて微笑む誠を他所に、雄叫(おたけ)びを上げた大男は何故か後ろへ歩いていく。

（…なんだ。そっちの方向には投げる物なんて…）

「冥土の土産に教えといてやる」
そう言って、男は自営業の店の柱に手を掛ける。

「俺の力を見た奴らのほとんどは怪力と言う。けどな、こいつは怪力じゃあねえんだ。“質量軽減(オーバースロー)”。俺が持ち上げる物はどんな物でも軽くなる。数字で表すと１００分の１。１００キロの物は俺が持ち上げれば１キロに変わる。更に言うと、俺が投げた後は元の１００キロに戻るって訳だ。まあ、強い力ほど制限が掛かるもんでな。俺が持ち上げねえとその効果は発揮されねえ。だから俺は怪力なんかじゃねえんだよ」

「なんで今更そんな事を…　？　」

「冥土の土産と言ったはずだぜ。お前は死ぬ。この一撃でなぁ　！　！　」

ズズズズズンッ、と地響きが起きる。

それは大男の掴んだ店が地面から浮き上がる際のものだった。
二階建ての店は担がれるように大男の片手によって持ち上げられる。

「これが俺の全力。どうだ、車や電灯とは大違いだろ。喰らえば一瞬で肉塊になるぜ。本当は半殺しにして生気を吸い取ろうと思ったが、テメエはこいつでぶっ潰さなきゃ気が済まねぇ」

「く、くっそぉ…」
誠は早くこの場から動こうと辺りを見回す。
周囲にはもう人っ子一人いない。
恐らく、全員避難したのだろう。

その時、今まで見えていなかった物が彼の視界に入ってくる。
それは、とある看板だった。
中に入っている電光に薄く照らされいるその看板には一文字だけが大きく表記されている。
それを見た誠は顔を真っ青にした。
看板にはこう書かれている。

“本”と。

つまり、誠がたった今ぶつかった後ろの店は本屋という事になる。
ついさっき、本屋に行くと言っていた人物を誠は知っている。

「……朱美……」
しかし、朱美と会ったのは２０分以上も前の事だ。
本屋にいるはずがない。

「……いる…はずが……　！　！」
背後を振り返ると、ひび割れたショーウィンドーから本屋の中を見

る事ができた。
中では先ほどの地響きの所為で本棚が乱雑に倒れている。
誠は隅から隅まで確認し、そして、発見した。
奥の方で倒れている北条　朱美を。

「朱美っっっ　！　！」
咄嗟(とっさ)に叫んだが、誠の声は朱美には届かない。
よく見ると、気を失っており、足が倒れた本棚の下敷きになっている。
中にいる人間に救助を求めようとしたが、本屋には朱美以外誰もいない。

こうしている間にも、大男が誠に狙いを定める。

「ま、待て　！　！」

だが、もう遅い。

「死ねえええええええええええ　！　！　！」

二階建ての店が丸ごと投げられた。
まるで巨大な砲弾のようなその建物は弧を描いて的確に誠の方へ飛んでくる。
このままでは誠の体はぺしゃんこになってしまう。
今動けばまだ回避できる。
だが、それでは本屋にいる朱美だけが巻き込まれてしまう。
朱美を助けるだけの時間も残されてはいない。

ここで誠が動かなければ彼も朱美も潰されてしまう。
しかし、誠が動けば被害は朱美だけ。

大男への反撃も可能になる。
けれど、

「…ふざけるな」
それを承知の上で、誠は立ち上がり、両手を大きく広げた。

「俺の所為で誰かが死ぬのはもう御免なんだよ　！　　！　逃げねえ　！　　！　俺は絶対に逃げねえぞ　！　　！」
決意を曲げない誠は飛んでくる砲弾という名の建物を前に立ちはだかり、一歩も動こうとはしない。
ただ一心に前を向く。
もう死からは目を背けない。
そう決めた誠の目は見開いたまま。

護りたい。
唯一無二の幼馴染みを。
真人も偽人も関係ない。
命を懸けて自分を護ってくれた杏のように。
自分も誰かを護りたい。
護りたい　！

そして、

建物が誠に直撃した。

その時だ。

誠の瞳が一瞬だけ光る。
それは紅(あか)でもなければ、蒼(あお)でもない。
紫色に光り輝く。

その瞬間。

誠の体を押し潰したはずの建物が再び弧を描いて飛び上がった。
しかも今度は大男目掛けて。

「なっ　！　！　なんだとっ　！　！　？」
予想だにしない光景を目の当たりにした大男は有り得ない現象を前に絶句した。

何故誠は潰されなかったのか。
何故投げた建物が跳ね返ってくるのか。
大男にそんな事を考えている余裕はなかった。

「や、やばい　！　すぐに逃げ……　！　？」
回避しようとするが、何故かその場から一歩も動けない。
足元を見ると、両足が凍りついて地面から離れない。
この氷が大男の左上半身を封じているのと同じものだとすぐに断定

できた。

「くっそぉ　！　　！　あの女、生きて……ぁあ…あああああああああああああ　！　　！　　！　」

ズドォオンッ、とこの戦いで最も激しい震動と共に、大男は自分が投げた建物の下敷きとなった。

誠自身にも何が起きたのかさっぱりわからなかった。
自分を押し潰したはずの建物がどういう理由（わけ）か同じ弧を描いて逆方向へ飛んでいったのだ。
彼が何かをしようとした訳ではない。
ただ彼は護りたいと心に強く念じただけ。
それでも、誠は勝った。
勝因など関係ない。
勝ったのだ。
生き残ったのだ。

勝利をもぎ取ったという達成感も、敵を倒したという手応えもないままに、誠は暫くその場に座り込む。
無心で地面ばかりを眺めていると視界に誰かの足が入ってくる。
見上げると、そこには知った顔があった。

「……！　？　桑折（こおり）！　！」
既に死んだと思っていた桑折　杏の姿だった。
彼女は所々負傷しているが、五体満足で誠の前に立っている。
「お前、無事だったんだな　！　　！　あの男が死んだとか言うからてっきり…」
「私があんな相手如きに死ぬ訳がなかろう。あの男が一撃を放つ瞬間、私は自分の体と氷の身代わりをすり替えた。だから男は私が死んだと錯覚して生気を吸い取るのも諦め、お前を追った。おかげで、ここまで辿り着くのに苦労したがな」
杏は軽く溜め息をつくと改めて誠を見た。
「それで、今のはどういう事だ」
「お、俺にも何が何だか…」
「嘘をつくな。あれは確かに能力（スキル）だった。力を使える者ならその力が備わった際にある程度の知識は自動的に頭に入るはずだ。それとも、あれは偶然で真人と偽人を区別するその瞳が能力（スキル）だとまだ言い張るつもりか」
「本当だって　！　それに、この目だって嘘じゃねえよ。現にあの男の瞳だって青く見えたんだから」
困惑する誠に、舌打ちした杏は背を向ける。
「まあいい。今日のところは家に帰れ。あの真人狩りはこちらで回収しておく。それとそこに倒れてる女もな」

「そうだ　！　　！　朱美は　！　　？　」
誠は思い出したように振り返り、幼馴染みの安否を確認する。
「安心しろ。気絶してはいるが、命に別状はない」
その言葉を聞いて、誠は胸を撫で下ろす。
「すぐに真衛隊・回収部隊がこちらに来る。いつまでもそこにいると一緒に回収されるぞ。じゃあな」
誠が瞬きした時には、杏の姿は既に消えていた。
とにもかくにも、危機は去った。
朱美を護る事ができたし、杏も無事、敵も倒した。
言う事なしだ。
なのに、誠の頭には様々なもやもやが残る。
何故なら、自身に宿っている力については何一つ解決していないからだ。
どんなに考えても答えは出ない。
自分自身の事なのに。
そして、当人が不完全燃焼のまま、この戦いは幕を閉じるのだった。

その夜。
日夜月町(ひやづきちょう)のとある一角で男が一人公衆電話を使って電話を掛けている。
話の内容は今日行われた少年と大男・高科(たかしな)　力(りき)の不可解な戦闘についてだ。

『観察できたのかい』
声は若干高めだが、電話の相手も男だ。

「ああ。直接拝見させてもらったぜ」

『相変わらず便利だね、君の力は』

あの場には高科、少年、真衛隊の少女、それと気絶した偽人しかいなかった。
それなのに、この男はあの戦いを至近距離で観察したと言う。

「高科を倒したあの少年、恐らくは覚醒型だ。戦いの中で能力(スキル)を使えるようになりやがった。たいしたもんだぜ」

『で、肝心の中身は　？　』

「多分、“全面拒絶(リフレクト)”だ。つまりは反射。自分に当たる全ての物を跳ね返すってとこだな」

『…厄介だね』

「だが、どんな力にも必ず弱点はある。そこを衝(つ)けば倒せない敵はいないんだぜ」

自信満々の言葉を聞いて、電話の相手は呆れた声で言う。
『とにかく、その少年の観察は引き続き、君に任せる事にするよ。念を押すけど、手出しはしちゃダメだよ』
「前にも言っただろ。俺は他人の生気を吸い取るような趣味はねえってよ。心配すんな。それじゃ」
そう言って、男は公衆電話の受話器を置く。
そして、何故か不敵な笑みを浮かべる。
「…反射、ね。こりゃあ楽しみだわ」

「あれは反射ではありません」
また別の暗がりでは杏が上官に電話で報告していた。
「正確には、護衛対象が使った力は反射ですが、彼の能力(スキル)はもっと別の何かです」
そう。
あの少年・白羽　誠が戦いの最中(さなか)に使った力が能力(スキル)だと言うのなら、

彼の瞳に宿っている力は理屈が通らない。

『それなら、何だというのだ』

電話の向こうで低い声が短く尋ねる。

「……わかりません。彼には不確定要素が多すぎます。最近になって真人になったと言えば、覚醒した自分の力も把握できていない。にも関わらず、真人狩りとまともに戦って勝利するなど、普通じゃ有り得ません」

『なら、普通じゃない、という事だな』

低い声が簡潔に述べた。

『何にせよ、上の奴らがあの少年に目を付けた事には何か意味があるはずだ。護衛は怠るな』

「…はい」

それに、と低い声は付け加える。

『護衛するのは桑折、お前なんだ。護衛するに当たって不具合が生じるのなら、それを解消するのもお前の務めだ。そうだろ』

要は、自分で調べろという事か。

杏は自分の中でそう解釈した。

『彼の護衛は引き続き、お前に任せる。気を抜くなよ』

「了解しました、隊長」

静かに携帯電話をしまうと、杏は肩を落とした。

（白羽　誠。これまでの護衛対象とは明らかに何かが違う。それを踏まえた上で務めねばな）

決意を新たに、杏は姿を消した。

深い深い暗闇に飲み込まれるかのように。

第2章／秘めたる力　前編

誠達が暮らす町・日夜月町（ひやづきちょう）。
そこから遠く離れた場所にある大きな街。
右も左も高層ビルの大都会。
いわば、コンクリートジャングル。
真夜中である今も尚、大通りには大多数の車が走っており、それを建ち並ぶ店の光が眩し過ぎるくらいに照らし出している。

しかし、こんな街でも暗い場所は必ず存在する。
むしろこういった街の方が陰をより一層濃くするのだ。
ビルとビルの隙間にあるこの路地も、瞼（まぶた）を閉じているか否かがわからなくなるほど暗い。
そこから男が一人、両手に何かを持って出てきた。
右手には血のついたナイフが。
左手には白い布が握られている。
男は大通りを歩きながら、堂々と布でナイフにこびりついた血を拭いていく。
純白だった布がじわじわと真っ赤に染まる。
けれど、男が余りにも堂々としている所為か、すれ違う通行人は誰ひとりとしてナイフの存在に気づかない。

すると、今度は別の路地へと入っていく。
奥へ奥へと迷いなく進んでいく男。
いつまで経っても暗がりが続く路地。
男の足音だけが路地の端から端へ反響する。
と、男は唐突に足を止めて更に奥を凝視する。

「…もう次の仕事か？」
男が目の前の闇に声を掛けると、
「相変わらず、僕を見つけるのがうまいね、君は」
闇の中から声がした。
が、姿は見えない。
「こんな人間味のねえ気配放つんはお前くらいだろ」
そんな事は気にも留めずに、男は握っていたナイフと布をしまい、
煙草に火をつけた。
「ふふ、そうかもね」
「で、今度の標的は」
「日夜月町に住む少年だよ。それも最近まで一般人だったね」
「そんな何の面白味もねえ依頼を俺が引き受けると
「面白味ならあるよ」
暗闇に潜む声の主が男の言葉を遮った。
「その少年は初戦闘で何らかの力に目覚め、高科（たかしな）を倒した」
「！　？　高科をか　！　…確かに奴は頭も弱いし、相手を嘗（な）めて掛かる性質だが、あの怪力は素人に止められるような代物じゃねえはずだぞ」
「そう。高科は少年を甘く見ていた。けど、高科の全力投球を跳ね返した彼の力は本物だよ」

「跳ね返した？　能力返し（カウンターアタック）。いや、全面拒絶（リフレクト）か。どっちにしろ、高科とは相性が悪いな」

それを聞いて、暗闇が不気味に笑った。

「相性が悪いのは、君も同じじゃない」

「馬鹿言ってんじゃねぇ。俺は相性なんかにゃ左右されねんだよ」

男は吸い終わった煙草を踏み消し、暗闇に背を向けた。

「日夜月町つったら、東京にある田舎町だろ」

「随分と詳しいね」

「まあな。あそこら辺は変わってるっていう印象が強いし、何度か行った事もある。けど、ここからだと船と電車を使っても2日はかかるぞ」

「構わないよ。排除してくれれば、時間は惜しまない。どうせ生気も吸い取らないんだろ」

「当っっっ然　！　俺は強い奴を殺せればそれでいいからな。…ところで、予定にあった例の餓鬼（がき）はどうすんだ　？　」

「そっちはまだいいよ。今は日夜月町の少年の方が重要。彼を始末できたら、君に頼むとするよ」

「そうか。ま、強けりゃあどっちからでもいいんだけどよ。そいつの情報は後で送れよ」

男は先ほどとは別のナイフを懐から取り出し、
「キヒヒ、久しぶりに楽しい戦いが望めそうだぜ」
刀身をペロリとひと舐めした。

耳元でやたらと甲高い金属音が絶えず鳴り響く。
早く止めなければ鼓膜が破れてしまいそうだ。
耳を劈(つんざ)く音は頭のすぐ近くからしている。
思いっきり手を伸ばせば届くはず。
早く、手を　――――――――

ガチャン。

「……ぅう……るさいぞ……目覚まし時計……」

誠の運命を変えたあの日から早くも3日が過ぎた。
あの剛腕大男を倒したという実感は未だに湧かない。
自分に能力(スキル)が目覚めたなど尚更だ。

誠が去った後、あの事態はどう収拾されたのか。
戦った敵は、護った幼馴染みはどうなったのか。
何もわからないまま3日という時間だけが過ぎた。
その間、誠自身は何をしていたかというと。
家で安静にしていた。
あの怪我じゃそれも仕方ないと言えば仕方ないのだが、丸々3日間家に居る必要性はあったのだろうかと誠は思ったが、自分を護衛してくれる人間が言うのだから、やはり仕方ない。
大男との戦闘の翌日、とある少女から電話があった。

『今のお前は重症だ。病院に行く必要はないが、3日はそこで大人しくしていろ。そうすれば傷はある程度完治する』

誠の電話番号をいつどこで入手したのか。

彼女の話によると、真人は誰しも真の力というものを無意識のうちに備えており、それが肉体回復の補助をして回復速度を向上させるとの事。
全くもって便利な話だ。
しかしまあ、彼女の言う事を聞かなくてこうなったのだから、ここは素直に従うべきだろうと考えた誠は、こうして大人しく自室に監禁されているという訳だ。

そして、4日目の今日。
あんなに酷かった怪我も無事に完治したし、今日の為にいつもより早起きもした。
確かめたい事は山ほどある。
重たい体を起こし、即座に制服に着替えた誠は朝飯も食べずに家を出た。
自宅に籠もっている間、誠はテレビのニュース番組を漏れなくチェ

ックしていた。
けれど、路地での乗用車の爆破も、商店街での地震や建物の崩壊も、あの事件については何一つ報道されていなかった。
その理由を確かめるべく、彼は商店街へと足を運ぶ。

「…やっぱり、夢じゃなかったか」
心にもない事を呟いたと誠は思った。
夢などとは微塵も思ってはいなかったからだ。
ただ、この光景を目にした瞬間、現実に引き戻されたような感覚だった。
辿り着いた商店街は想像通りのもので、崩れた建物は再建築が執り行われ、抉(えぐ)れたアスファルトは工事業者によって補強されており、今そのエリアは進入禁止になっている。
早朝という時間帯により、商店街自体は静まり返っているが、工事業者の人達は既に現場に入って作業を行っている。

「まだまだ掛かりそうだな」
業者の1人が別の仕事仲間に声を掛けた。
「ああ。でも仕方ねえよ。人間がどんなに足掻(あが)こうと自然の力には逆らえないんだからよ」
――――　自然の、力　？
誠は、彼らの会話が明らかに真実とは懸け離れたものである事に気

づく。

「あ、あの…」

「お　？　なんだい少年。こんな朝早くに」

「ここで何があったんですか。」

「ああ。確かこの商店街だけに地震があったんだっけか」

「いや、雷が落ちたんじゃなかったか」

誠には理解できない。

建物を崩壊させたのも、アスファルトを抉ったのも、誠を襲った真人狩りの男だ。

しかもその異様な光景を多くの人間が目撃しているはずだ。

それなのに、事実が有耶無耶（うやむや）にされている。

真人狩りの陰謀かとも思ったが、素人の誠が無い知恵を絞るよりももっと手っ取り早い方法がある。

わからないのなら真実を知っているであろう真衛隊（しんえいたい）に聞き出すまで。

誠はその真衛隊がいるであろう学校へ向かう。

日夜月（ひやづき）高校・２年Ｄ組。

ここが誠の教室だ。

一般生徒が登校するまでまだ４０分もある。

よって、閑古鳥(かんこどり)の鳴く教室はまるで時間が止まったような空間と化している。
その空間を突き破るように教室の扉を開けた誠は端から端まで見渡して溜め息をついた。
目的の少女はまだ来ていない。
彼の予想では、自分が早めに来る事も承知の上で少女が教室で待っているはずだった。
流石の彼女もそこまでは予測できないか、と誠は脱力感のまま自分の席に着く。
と、ポケットに入っている携帯電話が唐突に振動した。
電話を取るなり目的の少女の声が、

『やっと御登校か。今教室だろ。屋上に来い。話がある』
言うだけ言って、電話は切れた。

(あの女、俺の予想を軽々と越えてきやがる。なんで俺の居場所がバレてんだ。どっかで監視でもしてんのかよ)
更に深い溜め息をついた誠は席を立った。

ガチャリ、と金属製のドアノブを回して屋上の戸を開けると、長い黒髪をなびかせた男口調の少女が屋上一帯を囲んでいる金網の前に立っていた。
体の所々に包帯が巻いてあっても、何の支えもなしに真っ直ぐ立っていた。
彼女の名は桑折(こおり)　杏(あんず)。

無関係な真人を護衛する真衛隊の一員で、誠の身は彼女が護ってくれている。
杏は誠が出てきても振り返りもせずに話し始める。

「体の具合はどうだ」

「絶好調だぜ。お陰様でな」

「だろうな。では早速だが、質問タイムといこう。お前に聞きたい事が山ほどあるからな」

「おいおい待て待て待てよ　！　聞くなら俺の方が先だ。俺だって山ほどあるんだからよ」

「…いいだろう」

「3日前の戦闘の件がなんで有耶無耶になってんだよ。目撃者だってあんなにいたのに。これって真人狩りの仕業なのか」

だが、杏は首を横に振った。

「その原因は真人狩りではなく、目撃者である偽人にある」

「　！　？　どういう事だ」

「偽人には魂がないと前に言ったよな。自らの意思で行動できない彼らの頭の中は我々のとは全然違うんだ。偽人にこの世の異様な事柄、つまり我々真人の存在を理解させないように、理解力に制限が掛けられている。彼らが普通では有り得ない出来事を理解しようとした時、脳内にある制限が発動し、それに関する記憶が全て削除、

もしくは別の記憶に置き換えられる」

「記憶が…」

「制限はそれだけではない。彼らが異様な事柄に関わった時、脳が強制的に特別な信号を送り、逃避や機能停止といった形でその場を凌(しの)ぐという事になっている」

「な…なんだよそりゃあ。それじゃまるでロボッ……！！」

そこまで言いかけて、誠は口を噤(つぐ)んだ。

言い切ってしまうと本当に彼らがロボットに見えてしまいそうだったからだ。

「聞きたい事はそれだけか」

「…まだ色々と残っているが、次はお前のターンだ！」

公平にな！、と誠が指を差して言った。

その言葉を聞いて、鼻で笑った杏は漸く振り向いて彼と目を合わせる。

杏の瞳はやはり蒼(あお)かった。

「こちらも色々とあるが、まずはお前の力についてだ。3日前にお前が使った能力(スキル)。あれは“全面拒絶(リフレクト)”といって、自分に触れた物全てを反射させる力だと考えられるが……お前、本当に何も知らないんだな」

「何度も言ってるだろ。わからねえもんはわからねえんだよ。…というか、そもそも能力(スキル)に名前なんてあったのか」

「真人狩りの大男も自分の真の名前(スキルネーム)を名乗ってたろ」

…おおっ　！　と誠はあの大男が建物を放り投げる直前に言っていた言葉を思い出した。
“質量軽減（オーバースロー）”。
彼はそう名乗っていた。

「じゃあ、俺の力はそのリフレクトとかいう奴なのか　？　」

「私がそれを聞いているんだ。阿呆（あほ）」

いちいち勘に触る女だな、と誠は奥歯を噛み締める。

「確かにあの時使った力は反射だ。跳ね返した角度も力量も同じだったしな。しかし、お前にしか見えないという瞳の色。それは嘘じゃないのだろ」

「やっと信用したか」

「だとしたら、お前の能力（スキル）は反射じゃない。いや、正確には反射“だけ”じゃない。反射も瞳の力も使える何か」
杏はそっと目を閉じ、そして、何故か手の平を開いて見せる。
それは以前にも見た構えだった。
けれど、手の平の上から現れたのは前とは違った形の氷だった。
長さは３０センチほど。
鋭く真っ直ぐ尖った、１本の針状の氷。

「今から飛ばすこいつを跳ね返してみろ」

「……はあっっっ　！　？　」

「今も瞳の色がわかるのなら、反射もできるだろ」
「いやいやいや　！　それとこれとは別で　！　」
誠の反論などお構い無しに、細長い氷が問答無用に顔面目掛けて飛んでくる。
「ッ　！　！　」
仕方なく氷を睨みつける誠。
建物を跳ね返した時と同じように飛んでくる物体から目を背けずに身構えた。
そして　――――
サクッ。
氷の針が誠の頬に傷をつけて通り過ぎた。
「痛ってええええええてててて　！　！　！　」
頬を押さえて痛がる誠を見て、杏は軽く溜め息をついた。
「やっぱり駄目だったか」
「やっぱりってなんだよ　！　やっぱりって　！　！　」
「今使えるのなら、３日前も最後の一撃だけでなく様々な場面で使

えただろう。あの瞬間と今とでは“何か”が足りないんだろうな」
「…何かって　？　」
「それは自分で探すんだな。その力はもう、お前のものなのだから」

「お前の力、ねぇ…」
教室に戻った誠は、実感の湧かない言葉に少々混乱気味だった。
あの瞬間と今とで足りない何か。
そんな事、知る由もない。
何せ、あの時の誠は無我夢中で動いていたのだから。
唯一憶えている点といえば幼馴染みが後ろにいた事だけだが、それだけが足りない何かだとは思えないし、確証もない。
頭の中のモヤモヤを消し去ろうと唸っていたが、教室に入ってきた声がそれを一掃した。
「おっはよー　！　！　」
幼馴染み・北条　朱美の声だ。
それを聞いた誠は驚愕の表情で扉の方を向いた。
「お、お前　！　怪我は大丈夫なのか　！　？　ってか、真衛隊に

回収されたんじゃ…」

「シンエイタイ？　回収？　何の事？　？　ていうか、なんであたしが怪我した事知ってんの？」

「なんでって……！！」

その時、誠の頭の中に杏の言葉が蘇った。

『偽人にこの世の異様な事柄、つまり我々真人の存在を理解させないように、理解力に制限が掛けられている』

つまり、朱美の記憶からは3日前の戦闘に関わる事項がすっぽりと抜けているという事だ。

「本当に憶えてないのか。ほら、3日前に俺と商店街で会っただろ」

「うーん…そういえば、本屋の前で会ったような…ダメ、思い出せない。この怪我もどうやってしたのかわかんないのよね…」

そう言って、朱美は包帯の巻いてある片足を出して見せる。

「そ、そうか…」

誠の反応に首を傾げながら、3日前に護られた事もろくに憶えていない幼馴染みは自分の席に向かっていった。

（…俺と会うまでの記憶はうろ覚え程度ならあるみたいだけど、やっぱりあの戦闘に関しては何も憶えてないんだな）

改めて肩を落とした誠は項垂(うなだ)れるように机に伏せた。

すると、タイミングを見計らったようにポケットの携帯電話が短く

震えた。
恐らく、メールを受信したのだろうと誠が伏せたまま携帯を開く。
メールは2件来ていた。
1件目は登録されていない相手からだ。
それにはこう書かれている。

［言い忘れていたが、瞳の色で真人か偽人かを見分ける力の事は他言無用だ。お前の口からは誰にも言うなよ］

内容からして、送り主はまだ屋上にいるであろう桑折　杏だ。
番号だけでなくメールアドレスまで知っているとは、恐るべし真衛隊、と誠は彼女の隙のなさを改めて肝に銘じた。

そして、もう1件の内容はこうだ。

［マコくんへ。学校の帰りに駅前のスーパーで特売の卵買ってきて］
これは姉からだ。
わざわざメールで伝えてくるという事は、よほど今夜の晩飯に卵が必要不可欠なのだろう。
駅前という単語を見て、嫌な予感が頭を過ぎった。

（駅前か…、あまり気は乗らないが、姉貴の頼みなら仕方ないか。
3日前の二の舞にならないように細心の注意を払って行動しないとな…）
沈んでいた気持ちが更にどん底まで沈んでしまい、残酷なまでに憂鬱な心境のまま誠は今日一日を乗り切るのだった。

人間の精神力というのはやはり凄い。
末恐ろしいとまで感じさせるほどだ。
何せあの過酷な授業を、あの最悪な心境で乗り越えたのだから。
何はともあれ、放課後を迎えた誠はとてつもない解放感に満たされたまま駅前近辺に到着していた。

東京でも田舎の中の田舎である日夜月町。
それでもさすがに駅前くらいは人で賑(にぎ)わっている。
商店街とはまた違った雰囲気の駅前にはゲームセンターやファーストフード店など若者向けの店が多く、夕方という時間帯の関係もあって、見掛ける人間のほとんどが学生だ。
中には誠と同じ学生服の人もいる。
だが、誠は目もくれない。
何故なら、ここにいる人間の瞳が皆真っ赤に染まっているからだ。
誠が真人になってから1週間余りが経過し、その間にも駅前には何度か訪れた事があった。
けれど、青い瞳をした人間、すなわち真人は1度も見掛けた事がない。
みんな偽人、偽物だ。
しかし、だからと言って誠がどうこうするという訳でもない。
ただ、周りに対する関心が一切生まれないというだけ。
杏から話を聞いたのなら尚更だ。

（…こんなに人がいるってのに、なんで真人を1人も見掛けねえの

かねぇ。ま、見掛けたら見掛けたで一大事だけど。…でも、流石にこんな短期間で新たな敵が現れるなんて事はないだろうな。そんなシナリオ染みた展開があってたまるかってんだ）
朝ほどではないにしろ、未だに不安要素を抱え込んでいる誠はポジティブに駅へ向かう。
今、誠が歩いている場所は日夜月駅の南口周辺で目的地であるスーパーマーケットは北口周辺にある。
ここへ辿り着くには1度駅の中を突っ切らなければならない。
だから用もないのに駅へと足を運んでいるという訳だ。
護衛役の杏には着いてくるなと言ってあると共に、電話1本ですぐに駆けつけるようにも言ってある。
だから大丈夫だ。
胸を張ってスーパーに行ける。

自信満々の誠が駅に入ろうと前進した時、中から十数の人間が一斉に出てきた。
恐らく、たった今電車から降りた人達だろう。
何も珍しい事はない。
誠は構わずにその集団の横を素通りした、

その時、

赤い光の集団の中から青い光がポツンと1つ見えた。
瞬間、人混みを潜り抜けるように1本の刃が誠の無防備な横腹へと突き出される。

「ッ　！　？　」
その動きを辛うじて目で追う事ができた誠は咄嗟（とっさ）に逆の方向へ身を

引く。
布の裂ける音が腰元でしたが、斬られた感触はなかった。
見ると、着ている学生服に浅い刀傷が残っている。

「おいおい、なんでバレたんだ　？　完璧に死角を衝いたはずなのによ。端っから刺すのがわかってなきゃ避けられない一撃だったんだぜ、今のはよ」
一般人の集団に紛れていた1人の敵が立ち止まって愚痴をこぼす。

「まあ、いいか。自己紹介の機会が設けられたと思えば。俺はゾルド・ガレイグ。真人狩りだ」
黄土色のテンガロンハットとロングコートを着用している白人の男は改めてそう名乗った。
見た目からして外国人なのだが、母国語以外全くわからない誠に対して気を遣っているのか、話す言語は日本語である。

新たな真人狩りの出現。
これが誠の感覚を呼び覚ます。
神経が痺れるようなあの嫌な感覚を。

（こんな短期間で敵が現れるなんて事ない、だと。馬鹿か、俺は。今はもう常識なんかでで納まるような世界じゃないんだ。気合い入れろ　！　）
3日間自宅に籠もった所為で緩み切っていた生半可な気持ちを引き締め、誠は新たな敵を見据えた。
ゾルド・ガレイグと名乗る男は制服を切り裂いたナイフをコートの袖に素早く仕舞った。
幸か不幸か周囲にいる一般人はまだ気づいていない。

「聞いたぜ。お前、一般人とは思えないほどの力を秘めてるんだっ

てな。だったら見せてくれよ。お得意の反射とやらを」

（俺の力、もうバレてんのかよ…）

3日前に1回使っただけだというのに、誠の能力（スキル）が既に敵の耳に入っている。

この事から真人狩りの情報網がどれだけ広いかが十分にわかる。

そして、力を知っているという事は対策も練ってきているという事でもある。

（前は不意打ちでどうにかなった。けど、それが効かないとなると1人じゃどうにもならねえ）

誠は手元を見ずにポケットから携帯電話を取り出して、予定通り杏に助けを求める。

「早速、相方に救済措置か。無駄だぜ、そんな事してもよ」

ゾルドが何かを言っているが、気にせずに電話に集中する誠。

「……桑折か　！　真人狩りが現れたぞ　！　早く駅前に

バキンッ。

耳元で不快な金属音が鳴り、手に持っていた携帯の感触が一瞬で消えた。

振り向くと、携帯の液晶画面を貫いたナイフが携帯ごと地面に突き刺さっている。

「キヒヒ、ひとの忠告は素直に聞くもんだぜ」

桑折　杏は日夜月駅から徒歩5分の場所にある6階建てビルの屋上にいた。
理由は単純明快。
護衛対象である白羽（しらは）　誠を監視する為だ。
駅前を歩いている彼の姿は肉眼では確認できないので、杏は双眼鏡を覗（のぞ）き込んでいる。
誠とその周囲に未だ変化はない。

と、不意に何かを感じ取った杏は双眼鏡から目を離さずに、

「誰だ」

「へー、やるねー、あんた。アタイの気配に気づくなんて」
誰もいないはずの背後から気の抜けるような女の声がした。
それでも杏は双眼鏡を覗き続ける。

「私は馬鹿のお守（も）りで忙しいんだ。用がないのならとっとと失せろ」

「随分と冷たいじゃないか。」

後ろの方で地面に着地する足音が聴こえ、女の声も第一声より近くなる。
そこで漸く杏が双眼鏡を置いて振り返った。
目の前には色黒の女性が立っていた。
キラリと光る金色の髪、実りたての果実のような胸の膨らみ、スラッと真っ直ぐ伸びた長い足、意図的に肌蹴ているであろう動きやすそうな着物。
どれを取っても杏とは対照的なその女性は、まるでモデルのような立ち振る舞いで杏を見ていた。
外見からして着物だという事以外は明らかに異国人なのだが、杏は何のお構いも無しに日本語で言う。

「お前、真人だな」

「あら、どうしてだい　？　」

「人が滅多に出入りしないこの場所に、足音も無しに来る人間は大抵真人だと相場が決まっている」

「ふーん、洞察力も並み以上はあるようだね」
先ほどから人を小馬鹿にしたようなこの口調。
挑発しているようにしか聞こえない。
戦いを誘っているとしたら、この女、まさか、

「…真人狩りか」

「ビンゴよ。でもね、今日はその仕事で来たんじゃないの」

「なんだと」

杏が微かに眉をひそめるが、女は杏の表情など目もくれずに続ける。
「本来、真人狩りの仕事っていうのは真人から生気を吸い取る事。でも今回のは少し違ってね。同業者の仕事の補助、つまりは“足止め”って事なのよ」

「！　！　まさか　！　！　」
杏の頭の中に嫌な予感が過ぎるのとほぼ同時に、ポケットにしまってあった携帯電話が勢いよく鳴った。
素早く出ると、相手は護衛対象・白羽　誠だった。

『桑折か　！　真人狩りが現れたぞ　！　早く駅前に…ブチッ　！　！　』
中途半端な部分で、杏の返事も待たずに通話が切れた。
しかし、現状を把握するには十分な情報だった。
杏は目の前にいる女の様子を窺いつつ、再び双眼鏡に目をやる。
駅前では誠と先ほどまではいなかった男が対峙している。

「どうだい。これでわかったろ。あんたが護ろうとしてるものはあんたの目と鼻の先で殺されるのさ」
杏の焦った態度を見て、女が皮肉な笑みを浮かべる。

「…そうか。つまり、目の前の弱者をじわじわと甚振っている暇はないという事か」

「アタイは甚振るつもりだけどね」

第2章／秘めたる力　後編

誠は自分でも驚くくらい冷静だった。
力が目覚めたからなのか、それとも杏が護ってくれるという安心感があるからなのか、彼自身にもわからない。
ただ言えるのは、以前の戦いとは打って変わって、身が竦(すく)むような恐怖や戦いへの迷いはないという事。
誠は冴(さ)えた頭でこう考えていた。
勝つ事は考えるな、杏が来るまで時間を稼ごう、と。
しかし、ゾルドの一言によってその思考は一瞬で消し去られた。

「いつまで経っても来ないぜ、あの真衛隊(しんえいたい)はよ」

「！　？　どういうことだ　！」

「言葉の通りだぜ。奴が来るまで時間を稼ごうって魂胆だろうが、そいつは無理な話だ。奴は今、俺の同業者である人間に足止め喰らってんだからよ」

杏は来ない。
ゾルドの言葉に何の根拠もないのだが、可能性としては十分に有り得る。
真人狩りであるゾルドは誠の力について知っていた。
だとすると、当然、誠の護衛に就いている杏の存在も承知のはずだ。
情報網に長(た)けている殺しのプロが何の対策もなしに攻めてくるとも思えない。

よって、彼の言葉通りならば、杏もまた誠と同様に真人狩りと対峙していて、すぐに駆けつけるのは難しい状態にあるだろう。
ならば、やる事は１つだ。

「…桑折が来ないのなら、俺がお前を倒すしか他に道はないようだな」

飽くまで平静を装ったままで、誠はゾルドに挑発的な言葉を投げ掛けた。
対するゾルドは奥歯をギリギリと噛み締めている。
それは挑発に乗ったような仕草ではなく、どちらかと言えば、早く戦いたくてうずうずしているといった感じに見える。

「威勢がいいのは勝手だが、その挑発、本当に信じていいんだな。もし俺の期待を裏切るようだったら　――――　」

ギギッ、と唐突に後方で金属音が鳴り、先ほど地面に携帯電話ごと刺さったはずのナイフだけが再び誠の顔面の真横を通過してゾルドの元へと吸い寄せられるように戻っていく。

「　――――　問答無用に、殺す」

殺意の籠った言葉を吐き捨てるなり、ゾルドは動いた。
戻ってきた１本とコートの袖から出した２本のナイフを標的である誠へと一気に投げつけた。
敵の動きに細心の注意を払っていた誠はゾルドがナイフを構えた瞬間に走り出し、ぎりぎりでそれを回避する。
的を外した３本のナイフはそれぞれアスファルトに突き刺さった。

「なんで逃げるんだ　？　反射を使えばいいだろ」

「う、うるせえ　！　お前こそ、俺の力が反射だと知っててなんでナイフなんか投げんだよ　！」

「俺は強い奴と戦い。そんでもって、全力で来るそいつを斬り殺すのが大好きなんだよ。だから早く能力（スキル）を使えってんだよ　！　！」ゾルドははしゃぎ声を上げながら、更にナイフを投げる。

（使えるならとっくに使っとるわ　！　）
それを懸命にかわしながら誠は心の内で叫ぶ。
頭ではわかっていても能力（スキル）事態が全く反応しないのだからどうしようもない。

（くっそぉ　！　能力（スキル）さえ使えればこんなナイフ簡単に跳ね返してやるのによ　！　でも何をどうすれば能力（スキル）が発動するのかなんて全然わかんねえ　！　せめて使用条件とかがわかれば……そうか、それだ　！　！　）
頭の中で自己解決した誠は、全力で駆ける足に急ブレーキを掛け、敵と向き合う。

（こいつと今対峙できる事を好機だと考えるんだ。今朝のように前に発動した時の事を思い返して、どうにかして条件を揃えるんだ。…相手の攻撃をぎりぎりまで回避しないのは今朝に試した。次は、イメージだ。敵のナイフが自分の体に当たる瞬間に跳ね返るのをイメージするんだ）
確証のない可能性に賭けた誠は自分の皮膚に物体が当たる瞬間に能（ス）力（キル）でそれを跳ね返すイメージを頭の中で描きつつ、更に飛んでくる2本のナイフを睨みつけた。
しかし努力も虚しく、ナイフは彼の手足に切傷をつけて通過した。

「……ぐっ……が……　！　！」
言葉にできないほどの痛みが誠の心を折りに掛かる。
けれど、誠はまだ屈しない。

（…これも失敗か。なら次だ　！　）
誠は何が何でも諦めない。
何故なら、諦めなければ必ず勝機が見えてくる事を前の戦いで知ったからだ。

（あの時、俺は倒れて動けない朱美を死んでも護ると強く思った。
その気持は今回も同じ。周りにいる無関係な人達を護る　！　）
ゾルドの繰り出す攻撃が速すぎる所為で周囲の人間はこの危機的状況に未だに気づいていない。
逃げない一般人を護ろうと、誠は再度飛んでくるであろう鋭利な刃に意識を集中する。
その直後、背後から緊張感の欠片もないような声が聴こえた。

「おい、あれ……ナイフじゃね　？　」
一瞬だけ振り返ると、２０メートルほど後ろで地べたに座っている何人かの男子高校生の一人が地面に刺さったナイフを指差している。
それを耳にした他の一般人もこちらの様子を窺(うかが)っている。
誠は後ろに向かって叫ぼうとしたが、それより先にゾルドの方が口を開いた。

「こうちょこまかと逃げ回れたんじゃ、周りの偽人共がウザくなってくるな」
周囲の反応に気づいたのは誠だけではなかったようで、ナイフ投げを止めたゾルドは着ているロングコートをバサリッと大袈裟(おおげさ)に開く。
すると、コートの内側から何十本ものナイフが飛び出し、四方八方へ散る。

「！　！　くっそぉ　！　！」
全部を止めるのは無理だと瞬時に判断した誠は背後にいる人間だけでも護ろうと自分の方へ飛んでくる４本のナイフを全身で受け止めた。

「が、ぁぁぁあああああああ　！　！　！」
鋭く尖ったナイフのほとんどが今度は通過せずに肩、腕、腿にそれぞれ突き刺さった。
先とは比べ物にならない痛みが誠に降り掛かる。
それを見た周囲の人間が一斉に悲鳴を上げて逃げ出し始めた。

「おいおい、何してんだよ」
誠の痛々しい叫び声を聞いたゾルドは残念そうに言う。

「今のは邪魔な部外者を撤去する為の威嚇だ。それを死に物狂いで受け止めてんじゃねえよ。戦えなくなったらどうすんだっての」
ゾルドは飽くまで誠と戦いたいらしい。
辺りに倒れている人がいない事から、本当に一般人を傷つけてはいないようだ。
しかし、だからと言って許せる行為ではない。

「……ぐっ　！　！　…お前は一体、何を考えていやがる……があっ　！　！」
誠は痛みに耐えながらも、刺さったナイフを1本1本抜いていく。

「関係ない人達を巻き込みたくないなら、こんなとこでナイフなんか振り回すんじゃなえよ　！　…ぐがぁぁっ　！　！」
最後の1本を抜き終わり、痛々しい表情を見せる誠。
だが、それを見ても全く動じないゾルドは、抜け落ちたナイフを見

つつ答える。

「勘違いすんな。別に部外者を巻き込みたくないとか、そんなくだらない理由で追い払ったんじゃねえよ。見ての通り、俺はナイフのみで凄腕の真人だけを殺る。そん時にそのナイフで殺した分だけ手持ちのナイフを増やすようにしてんだよ。要はジンクスみてえなもんだな。で、そこら辺にいるなんでもねえ偽人のつまらねえ命の為にいちいち本数増やしてたら勿体ねえからよ、わざわざ逃がしてるって訳だ」

「……」

「因みに言うと、今俺が持ち合わせているナイフは１９本。お前で２０人目って事なるな」

「……んでだよ……」

「あ　？　」

「なんでだよ　！　！　なんで平気な顔で大勢の人間を殺せるんだよ　！　！　お前も同じ真人なんだろ　！　！　」

喉が裂けるかと思った。

体中で膨れ上がる熱の所為で体温が一気に上昇し、立ち眩みがした。

しかし、それでも尚、誠は叫び続ける。

「お前が殺した１９人の真人達は自分から死を志願していたか　！　？　違うだろ　！　！　その人達は皆生きたかったはずだ　！　！　中にはお前みたいに戦いが好きな奴もいたかもしれない…けど　！　！　そいつだってお前が殺そうとしていなければまだ生きてたかもしれないんだぞ　！　！　死んでいった人達の気持ち、その

死によって後に取り残された人達の気持ちを考えようとはしねえのかよ　！　！　！」

「ないね」
ゾルドは一蹴した。
誠の熱意の籠もった言葉を、死んでいった人々や現世に残された人々の思いを、顔色一つ変えずに軽く一蹴したのだ。

「そんな事、一々考えててどうする。そんなんじゃあ大好きな殺しはできねえだろうが。それによぉ、人ってのは遅かれ早かれいつかは死ぬんだぜ。くだらねえとこで死ぬよりも俺に殺された方がよっぽどマシな死に方だろ。俺に殺された人間は皆そう思ってるはずだぜ。ま、知ったこっちゃねえけどな」

右手が強く握り締められる。

「てかよ、お前も今からその仲間入りするんだから、どう思おうと関係ねえだろ。つっても、能力（スキル）もろくに使わねえ奴をナイフの数に入れたくねえな」

口の中で血が滲むほど奥歯を噛み締める。

「…よし。お前は素手で刺し殺すとしよう。その貧弱な体なら手刀でも十分に貫けるだろうしな」

怒りに満ちた目線が眼前の男に向けられる。

「って事で、潔(いさぎよ)く死んでくれ、雑魚」

ゾルドは手刀を構えて真っ直ぐに向かってくる。

その一撃に迷いはない。

そして、常人の目では追えないくらいの速度で手刀が放たれた。

しかし、

「　ッ！　？　」

標的を貫く寸前で何かに止められた。

目で見ずとも感触で理解したのか、ゾルドの表情が一瞬でこれまでに見せた事のない驚愕のものとなった。

ゾルドの一撃を止めたもの、それは手だった。

何の変哲もない右手が手刀をがっしりと掴んで離さない。

「テメエの考えてる事が俺には理解できねえ。だから、テメエのその腐った思考をぶっ潰して1から考え直させてやるよ」

それが、少年の瞳が紫色に変わる瞬間だった。

ビルの屋上で見知らぬ真人狩りの女性と対峙した杏は、戦うには狭すぎるくらいの空間で頻(しき)りに繰り出される敵の攻撃を黙々とかわしていた。
あの女が繰り出すそれはまるで尖った鉄骨のような物で、女が地面を擦ると杏の足元にピンポイントでそれが何本も出現する。
女が地面を擦る瞬間に動けば容易に回避できるのだが、反撃できるほどの隙がない。
だからただひたすらにかわし続けているという訳だ。
とは言え、このままでは足場がなくなってしまう。
早々に対策を練らなければならない。

そんな事を考えていると、女の方が口火を切る。

「逃げても無駄よ。その内、まともに立てる足場だってなくなるんだから」
どうやらあの女もそれが狙いのようだ。

「……足場がなければ、造るまでだ」
尖った鉄骨を避けながら、杏は何かを持つように拳を握りしめる。
すると、拳から５０センチ余りの氷の刃が一瞬で現れた。
杏がそれを鉄骨に向けて何度も振ると、根元からバッサリと斬れ、次々に倒れていく。
両者の間を隔てていた障害物が倒れた事によって道が開けて、女が新たに障害物を出現させる前に杏が一気に間合いを詰める。
女が再度地面を擦る動作をしたが、構わず氷の刃を振り抜こうとする、が、刃が女に当たる寸前でその行動は中断された。

何故なら女のすぐ後ろにある、下の階へ下る為のペントハウスの壁から鋭利な鉄骨が真下からではなく真正面から突撃してきたからだ。杏が反射的に身を横へ反らしたが、かわし切れないと判断して両腕で防御の体勢を取った。

「ぐっっっ　！　！　」

両腕に凄まじい衝撃が走ると同時に、体が後ろへ吹っ飛ばされた。危うく屋上の枠の外へ放り出されそうになり、咄嗟に縁を囲む金網を掴んで無理やりよじ登った。

「んふふ、地面にしか出せないと誰が言ったんだい。アタイの力、“剣山地獄（スチールフレーム）”は平地にならどこにでもこの鉄骨を出す事ができんのよ」

金髪色黒の女が得意気に言う。

「ほら、せっかくアタイが真の名前（スキルネーム）を名乗ったんだ。あんたも名乗りなよ。力のある真人同士が本気で戦う時は名前よりも真の名前（スキルネーム）を名乗るのが礼儀。真衛隊のあんたならよくわかってるはずだろ」

「……ッ　！　！　」

杏はそれに答えずに氷の刃を思い切り投げた。

「そうかい。名乗る気はないんだね。礼儀知らずな女だ」

女は立ったまま足で地面を擦り、顔面へ無雑作に放たれた氷の刃を1本の鉄骨で軽々と防いだ。

鉄骨に突き刺さった氷の刃を見て、金髪色黒の女が更に皮肉な笑みを浮かべる。

「力の差は歴然だね。ま、わかってた事だけどさ。高科（たかしな）　力（りき）みたいな雑魚相手に死に掛けた奴がアタイに勝てる訳がない。足止めのつ

もりだったけど、このまま潰しても構わないわよね。本丸の方も片付きそうだし」

「！？」

その言葉に、杏は駅前の方に耳を欹(そばだ)てる。

遠くの方で人々の叫び声が微かに聴こえる。

恐らく、向こうの真人狩りも相当の手練れだろう。

力の使えない誠1人では長くは持たない。

早く行かなければ。

「そんな訳だから、潔(いさぎよ)く死んでよね。名前も知らない無礼者っ！！」

そう言って、女は再度地面を擦った。

尖った鉄骨が無慈悲(むじひ)にも杏の足元から出現し、そして、

ズゴンッ、と。

鉄骨が杏の体を持ち上げたまま伸び切った。

「んふふふふふ、その場で跳んでたみたいだけど、どうやら速すぎて避け切れなかったようね」

杏が突き刺さったと判断した女は、優越感に浸りつつ、伸び上がった鉄骨の先を見上げて、

驚愕した。

杏が立っている。

本来、刺さっていなければ可笑(おか)しいはずの尖った鉄骨の上に立っている。

「……あれは……」

目を凝らしてよく見ると、鉄骨の先に薄く氷が張られており、杏はその上に立っている。

「い、いつの間に　！　？　」

「いつの間に、だと　？　お前の鉄骨が出てからに決まっているだろ」

今度は杏の方が皮肉な笑みをうっすらと浮かべている。

「馬鹿なっ　！　！　今の一瞬でできる訳が…」

「できるから、こうして無事な訳だが」

「この……　！　！　？　」

挑発的な態度が勘に触ったのか、女は更に新たな鉄骨で応戦しようとした。

が、手足が全く動かない。

まるでセメントで固められたようだ。

見ると、肩、肘、手首、膝、足首と、手足の所々が凍りついている。

「関節を……くそっ　！　！　」

片や無理やりに手足を動かそうと足掻(あが)く女。

「やめた方が賢明だ。手足が？げるぞ」
片やそれを鼻で笑う杏。
「こんな状況になったのもお前の判断ミスの所為だ。お前は私を知らなさすぎた」
「！？どういう事よ！！」
「確かに私は高科　力とかいう大男と戦い、深手を負った。しかし、それは後ろに護るべき馬鹿がいたからだ。本調子の私なら瞬殺だっただろうな」
「そんなの口では何とでも言えるっての！！」
杏は女の野次を無視して、
「ところで、お前はあの大男が私と戦った後にどんな状態だったか知っているか？　白羽　誠に敗北した大男はこちらで回収したが、そちらにも情報は廻っているはずだろ」
「……！！まさか…」
「そう。大男の体には氷の塊が付いていた。無論、私が付けた物だ。つまりは、こう言う事だ」
「ッ！！！」
杏の言葉と同時に、女の体が本格的に足元から凍り始めた。
関節を封じている霜のような薄い物とはまた別の、固形の氷が動けない体を更に固めに掛かる。

対する杏は悠長に氷の張った鉄骨から飛び降りて、わざと女の正面まで歩いていき、

「お前、さっき私に真の名前（スキルネーム）を名乗れと言ってたよな。“水流結晶（ソリッドアイス）”。空気中にある水分の流れを操り、一ヶ所に集めて一気に凍らせる力だ。普通に凍らせるなら雑作もないのだが、動く標的に対しては凍らせるのにある程度の時間が掛かる。だが、１度標的の周囲に水分を集めてしまえばこっちのもの。そいつがどんなに動こうと氷漬けは確定だ。大男の時は集中力が衰えて的を外したが、今度は逃さない。端から端まで凍りつけ」

「くそっ　！　！　このっ　！　！」

体を縛る氷は遂に肩まで上り詰め、動かせるのは首から上だけとなった。

「安心しろ。死にはしない。完全に凍った生物は暫（しばら）くの間、仮死状態となって眠り続ける。次に目を覚ます時にはお前は我々の組織に回収されているだろう。その後でどうなるかはわからんがな。そろそろ時間のようだな。では、さらばだ、名も知らぬ負け犬よ」

「くそっ　！　！　くそくそくそくそっ　！　！　くっっっそおおおおおおおおおおお　！　！　！」

女が凍りつく直前に見た光景は恐ろしいものだっただろう。

世界が地獄に見え、眼前の少女が悪魔に見えただろう。

これが桑折（こおり）　杏のやり方だ。

相手に恐怖と絶望を与え、戦闘意欲を根こそぎ奪い取る。

けれど、殺しはしない。

死よりも恐ろしいものを知っているから。

誠は無我夢中でゾルドの一撃を止めていた。
常人の目では追えないような攻撃を何故止められたのか、彼自身にもわからなかった。
ただ反射的に手が出て、気づけばゾルドの腕を掴んで動きを止めていたという感じだったのだ。
そして、両者の動きが停止してすぐに誠の中で何かが変わった。
体内の奥底で熱の塊のようなものが生まれ、力が漲(みなぎ)ってくるのがわかる。

――――――　これが、能力(スキル)か。

以前に使った時は一瞬だった為、能力(スキル)使用時の状態や感覚がどんなものなのか体感できなかった。
それでも今なら使えるという確信があった。
まるで脳や体がそれを教えてくれるかのようだ。

「……キヒ、キヒヒヒヒヒヒヒヒヒ……」

金属音のような高笑いが聴こえた。

「漸く本領発揮か。待ちくたびれて殺しちまいそうになったじゃねえかよ」

掴まれた腕を素早く振り払うと、ゾルドは１０メートルほど間合いを取った。

そして、着用しているテンガロンハットとロングコートを脱ぎ捨てる。

そこで初めてゾルドがスキンヘッドでタンクトップだという事に気がついた。

「早速見せてもらおうか。ご自慢の反射とやらを」

ゾルドの傍らに落ちた帽子とコートから5、６本のナイフが飛び出し、一斉に飛んできた。

それに対し、紫色の瞳を光らせている誠は避けもせずに受け止める。

刃が誠の皮膚に接触した瞬間に、飛んできた全てのナイフが弾かれたように方向転換してゾルド目掛けて飛び返る。

それを予測通りといった動きで横にかわしたゾルドは、更に攻撃を畳み掛ける。

飛び返って地面に突き刺さったナイフを能力（スキル）らしき力で再び操り、それに加えて己が元々持っていた3本のナイフを素手で投げ、多方向からの攻撃を仕掛けてきた。

「何度やっても同じだ　！　」

今回は一瞬じゃない、暫くは使える　！　そう感じた誠はどんなに数が増えようと、どの方向から来ようと全て跳ね返せる自信があった。

しかし、

ザザザッ　！　！　と。
誠の皮膚に接触したナイフの多数は跳ね返ったが、残りは誠の肩や足を傷つけて通り過ぎていった。
「ッ　！　！　？　」
想定外の事実に衝撃を受けた誠を再度激痛が襲う。
（なんでだ　！　？　なんで跳ね返らねえ　！　！　？　同じナイフだろ　！　！　）
「キヒヒヒヒヒ、なるほどな」
誠よりも先にゾルドの方が答えを出した。
「その反射には“穴”があるようだな」
「穴だと」
「そうだ。お前の能力（スキル）は全てを跳ね返せる訳じゃねえって事だ。どんな力にも必ず死角はある。その死角を衝かれればお前は終わる。さあ、どうすんだ　？　」
死角。
その言葉に妙な違和感を覚えた誠は、跳ね返らなかったナイフの跡を追うように後ろを振り返る。
そこには3本のナイフがアスファルトに刺さっていた。
（……違う。俺には向かってくるナイフの動きが見えていた。……いや、全部かと言われるとそうじゃなかったのかもしれない。けど、見逃したのが1本ならともかく、3本は多すぎるだろ。きっと死角

じゃない他の何かが原因で…）
しかし、誠の考察はそこで途切れた。
ゾルドが次の攻撃に移ったからだ。
今度は一気に間合いを詰めてくるゾルド。
実際には走って近づいてくるのだが、初速が速すぎて誠の目にはテレポートしたように見えた。
能力（スキル）の有無は関係なしに、誠は反射的に体を後ろへ反らした。
辛うじて回避する事に成功し、ゾルドのナイフは空を切った。
だが、そんな事は気にも留めずにゾルドは更にナイフを的確に振り回してくる。
ザクリ、ザクリと。
皮膚に切り傷が付いていく。

（ッ　！　？　また反射しない　！　！）
こうなってしまえばもう死角うんぬんの話ではない。
誠の能力（スキル）は飛んでくる物しか跳ね返せないのか。
それとも誠が気づいていないだけで、既に能力（スキル）が使えない状態になっているのか。
今の誠に確かめる術（すべ）はない。
今できるのはなるべく致命傷を避ける事。

容赦なく斬り掛かってくる刃物を、ダメージを最小限に抑えてかわす誠。
彼は最早頭で考えてはいない。
辛うじて目で追えたナイフを反射的に避けているだけだ。
対して、思うようにナイフが当たらないゾルドは更に高笑いして、
「いいぜ、いいぜ　！　！　その意気だ　！　！　おもしれえ　！　！　けど、まだまだ足りねえ　！　！　もっとおもしろくしようぜ　！　！」

ナイフの速度がより一層増した。

その瞬間。

ギンッ、と。

まるで金属製の籠手(こて)に当たったかのような音と共に、腕に当たったナイフがあらぬ方向へ弾け飛んだ。

力を使った当人よりも先に、今のは反射だと気がついたゾルドは一端身を引いた。

（……反射…した……）

ナイフの速度が上がった途端に反射した。

今の一撃が能力(スキル)発動の条件を満たしていたのか。

駄目だ。

もう思考が追いつかない。

しかし、ゾルドの次の言葉から、可能性のある発動条件の幅が一気に狭まる。

「どうやら能力(スキル)がまだ不安定のようだな。危機感が足りねえんじゃねえのか？　キヒヒヒヒ！　まあ、“能力(スキル)を使って速度を上げた”今の一撃は、本能的に悟ったのか流石に反射できたみてえだな」

「！？　今の一撃、能力(スキル)使ってたのか！？」

あまりの驚きに、誠は思わず普通に尋ねてしまった。

「ああ。俺の真の名前(スキルネーム)は“操剣斬殺(オペレーションソード)”。刃物を自在に操るモンだ。飛んでたって、地面に刺さってたって、握ってたって操れる。さっきから度々使ってんだろ」

ゾルドが軽く手招きすると、たった今弾き飛んだナイフが糸で操ったように手元に戻ってきた。

「ナイフを操る力…」

これだ、と独りで納得した誠は焦らずに相手の動きを見据える。

ゾルドの方も誠が様子見している事に気づき、それでも敢(あ)えて動く。

ナイフを持っていない方の手をゆっくり挙げるとそれに合わせて周囲に散らばったナイフやコートに収めてあったナイフが誠を囲むように浮き上がった。

恐らく、奴が握っているナイフ以外の物、つまり、他の１８本全部だろう。

誠が見上げると、目を合わせるかのように刃の矛先が誠の方へ向く。

「キヒヒヒヒヒヒヒ　！　！　さあ、どうするよ　？　そんな隙だらけの能力(スキル)で止められるか　？　まあ、これが止められても俺自身が斬り掛かる直接攻撃は止められねえだろうがなあ　！　！　キヒヒ　！　！　」

奴は本気だ。

本気でこの数の刃を放ってくる。

上等だ。

「来いよ」

窮地(きゅうち)に陥っているにも拘らず、一歩も引かない誠。

周囲を囲む刃達をぐるりと見回すとゆっくりと受け身の姿勢に入った。

「いい度胸だ　！　！　褒美(ほうび)としてお前の死を２０本目にしてやる。

有り難く思えよなっっっ　！　！　！　！　」

叫び声と共にゾルドと周囲のナイフが一気に襲い掛かる。
速度もこれまでより遥かに速い。
避ける事も生身で受け止める事も無理だ。

そして。

刃は突き刺さった。

時が止まったように感じた。
いや、実際に止まったのかもしれない。
周囲にある物全ての動作が停止したからだ。

やがて、水滴の落ちる音が時間の流れを元に戻した。
真っ赤に染まった水滴。
血だ。
血が刺さったナイフを伝って1滴ずつ地面に落ちている。
血のついたそのナイフは背中、両足、右手に深く刺さっている。

しかし、それは誠の体ではなかった。

「……なんで…だ……」

誠を狙って放たれたナイフは、半分がゾルドの体の各所に刺さり、残りは誠を避けるようにアスファルトに刺さっていた。
二人が倒れないのは互いの体を掴んでいるからだ。

「…お前の能力（スキル）は反射のはず。なのに、どうして俺の体にナイフが刺さるんだ」
表情から余裕が消えたゾルド。
今の一瞬で何が起きたのか、この一撃に自信があった彼には理解できなかっただろう。
全方向から放つナイフなら避けることは不可能。
反射できたとしても上から放ったのなら自分に跳ね返ってくる事はないし、きたとしても正面ならかわせる。
しかし、ナイフは背後や真横と予想外の方向から飛んできたのだ。
さらに予想外の事に、ナイフを握っていた右手の甲に飛んできた別のナイフが刺さっていた。
まるで狙ったかのように。

「……狙ったんだよ」
思考を読み取ったような答えが返ってきてゾルドはぎょっとした。
そんな事は構わずに誠は続ける。

「俺の力は反射じゃねえんだ。…いや、正確には反射もできる」

「なんだとっ　！　？　」

「正直な話、俺自身も驚きだ。まさか反射以外にできる事があるなんてな」
誠の顔から笑顔がこぼれた。

それは勝利を確信した優越感でも、相手を誘うような挑発でもない。安堵した時に不意に出る笑みだった。

「お前、さっき死角があるだとか、力が不安定だとか言いたい放題言ってくれてたよな。理解できてないお前に教えてやるぜ。俺が反射できなかったのは発動条件が一致しなかったからだ。俺が初めに反射に成功した時、ナイフは浮いていた。その次の多方向からの攻撃は跳ね返せる物とそうでない物があった。そして、その次の接近戦ではお前が能力（スキル）を使った瞬間に反射が発動した」

「まさか…」

「そう。俺の能力（スキル）は、相手の能力（スキル）を操る力だ。俺が反射できていたのは相手の力を反射するように“無意識の内に”操作してたって訳だ。その気になれば能力（スキル）で操ってるナイフの飛ぶ方向を変える事だってできるんだよ」

無意識の内に操作していた？

果たしてそんな事が可能なのか？

ゾルドの疑問は深まる一方だ。

が、誠の表情から見て、言っている事は間違ってはいないだろう。

半ば解説染みた話を聞いている内に、ゾルドの意識が朦朧（もうろう）としてきた。

「…名はなんだ」

「え？」

「力の正体がわかったんなら、真の名前（スキルネーム）もあるだろ。最後くらい名

乗れよ」

誠は少し間を置いて、

「“制御不能(スキルジャック)”だ。…と言っても、色々と矛盾点もありそうだから仮名だけどな」

「“制御不能(スキルジャック)”か…。悪くねえな、キヒヒ」

次第に体の力が抜けていく。

「どうせなら完璧な能力(スキル)で戦いたかったけどよ。まあ、次の機会に改めてぶっ殺すと…しよう…」

誠を掴んでいた手が離れ、ゾルドの体が血の溜まったアスファルトに力無く倒れた。

それを横目で確認した誠は、

「…馬鹿野郎。こっちはもう御免だぜ…」

誠も血溜まりに伏せる。

少々ひんやりした血が体や服に染み込んでいく。

どちらの血なのかはもう判別できない。

（一生の最後が血の中ってのは後味が悪いな…）

そこで、意識は途切れた　――――

行間

僕は何故逃げているんだ　？
裕福な家庭に生まれ、裕福な生活を送り、医者である父の仕事を受け継ぐという将来の職業も決まっている。
それなのに何故こんなところにいる。
何故こんな事をしている。
理解できない。

「おいおい、手間掛けさせんなよ。大人しく俺に生気をよこせっての」

また来た。
何故この男は僕の事を追い回すんだ。
それもこんな人気の多い所で。
僕が何をしたというんだ。

「さてと、どうやって瀕死にすっかな」

何が真衛隊だ。
何が真人狩りだ。
もう嫌だ。
もううんざりだ。
こんな生活、もう終わりにしてやる。

「！？……これは……」

なんだ？
奴の表情から余裕が消えた？
いや、奴だけじゃない。
周りにいる無関係な人達も表情が歪んでいる。

「くそっ！！」

男も周りの人間も揃って地面に倒れてしまった。
どうなってるんだ！？
僕は何もしてないのに。

「……どうやら能力（スキル）が目覚めちまったみてえだな」

能力（スキル）？
それってあの異様な力の事か？
僕も奴のような人間兵器と化したって事か？

周りの人達の叫び声が絶え間無く聞えてくる。
駄目だ。
耐えられない。

「…見てみろよ、周りの人間を。お前の所為で倒れてるんだ」

――――　やめろ。

「いいか。お前がこいつらを苦しめてるんだ」

――――やめてくれ。

「この寸劇は、お前がやったんだ！！」

やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！

第3章／裏切り者と裏切らない力　前編

ここは、どこだ　？

俺は、死んだのか　？

桑折（こおり）は　？

ナイフ使いは　？

駅前の人達は　？

重たく被さった瞼（まぶた）がゆっくりと開かれる。
瞳に映った景色はぼやけていて正確に認識できなかったが、視界全体が白一色で埋まっている事だけはわかった。
また、段々と意識がはっきりしてくると自分の体が仰向け状態で寝かされている事も発覚した。
起こそうとしたが、全身の感覚が全く無い。
目の動きだけでもがいていると、かなり近い距離で人の気配がした。

「お目覚めかい、白羽　誠君」
男の声がした。
聞いた事のない声だ。

「……お…前……」

「ああ、喋らなくていいよ。まだ麻酔が完全に切れていないから、うまく口が動かせないだろう」
目を動かして声の主を探すと、覗き込むように男の顔が視界に入ってきた。
なんとも貧弱そうな男だった。
肌は紫外線の影響を一切受けていないくらい白く、運動とは無縁といった体付きで、白衣に縁無し眼鏡と科学者のような格好をしている。
何者なのか。
敵か、それとも味方か。

男は眼鏡を軽くずり上げると、柔らかな表情で話し続ける。

「安心していいよ。僕は医者だ。君に危害を加えるつもりはない。と言っても、あんな戦いの後だから信じろという方が無理だよね。まあどちらにせよ、ここは安全だから大丈夫だよ」

「……」

「あ、なんでこんな場所にいるかって　？　君があの真人狩りに勝った後、瀕死状態の君を桑折君が抱えて連れて来たんだ。自分が怪我を負っているにも拘(かかわ)らずね」

「……」

「ああ、あの真人狩り？　その事なら心配しなくていいよ。彼を含めて、死者はゼロ。これも君のおかげさ。あの真人狩りの男は部隊に回収されちゃったけど、殺されはしないだろう。けど凄いよね。前回といい、今回といい、相手を瀕死にさせるけど殺さずに勝っちゃうんだもんなぁ」

よく喋る男だ。
聞いてもいない事をべらべらと。
だが、大体の状況は把握できた。
桑折　杏もゾルド・ガレイグも高科（たかしな）　力（りき）も周囲にいた人々も生きている。
誠は誰も殺してない。
誰も。

「そういえば、君の力、まだ未完成なんだって。大変だねぇ。自分だけが使える自分だけの力なのに勿体無いねぇ。なんなら、僕が君の力を引き出してあげようか？　手段は選ばないけどね」

「！　！」
注射器を片手に不気味に微笑む男を見て、誠は目の動きだけでそれを拒んだ。

「冗談だよ、冗談。さっきも言ったろ。僕は医者だ。そんな事できるはずもない」

――――　この男、信用できねぇ。

誠は心底そう思った。

「だけど、助言なら少しだけできる。聞いた限りじゃあ君の力はそこらの能力（スキル）とは勝手が違うようだね。正体もわからなければ、使い方もわからない。まるで他人の能力（スキル）のようだ。…もしかして、君の力じゃないんじゃない」

「…何…を……」

男の意味深な言葉に反論しようとしたが、途端に視界がぼやけて再び意識が薄れてきた。

まるで眼鏡を外した瞬間のようなぼやけ方で、にんまり笑っていた男の表情すら確認できない。

「また眠るのかい？　それだと僕の方が暇になっちゃうんだけど、まあ一度死に掛けてるんだから仕方ないか。大丈夫、次に目覚める時は君の日常に戻っているから。僕としては改めて話をしたいんだけどね。それじゃ、良い眠りを」

待て。

まだ話は終わって　――――――――

眼前に真っ暗な闇が広がっている。
眺めていると飲み込まれてしまいそうな、深い、深い、闇。
そこに一筋の光の線が闇を切り裂くように入ってきた。
光は瞬く間に闇を消し去り、眼前を我が物にする。
眼前が黒から白に代わってしまい、そこはもう眺めてはいられない景色となった。
そこで漸く瞼が開かれ、また新たな景色が眼前に広がった。

目を覚まして最初に飛び込んできた光景は、開き切ったカーテンだった。
光の正体はこれか、と即座に判断して再び瞼を閉じようと思ったところで、誠は我に返った。

「うおおおっっっ　！　！　！　！」
誠は文字通り飛び起きた。
慌てて辺りを見回すと、そこは見慣れたものだった。

――――　俺の、部屋　？

最初に目に入ったカーテンも、寝ていたベッドも、周囲にある机やらテレビやら乱雑に置かれたゲームソフトやらも全て普段自分が使っている物で、ここは紛れもなく誠の部屋だった。
ついさっきまで知らないベッドに寝かされていたはずなのだが、何故普段通りに自分のベッドで寝ていたのか。
寝起きの所為なのか、思考回路がうまく働かない。
そんな可動し切れていない思考回路に耳を伝って新たな情報が入ってきた。

「マコく～ん、起きたの　？　」
聞き覚えのある気の抜けるような声が階段下からした。
混乱が収まらない誠は、

「お、おう　！　」
と空返事をしてしまった。

それを聞くなり、声の主が階段を駆け上がって部屋に突入してきた。
声の正体は誠の姉だった。
姉はその勢いで誠の方へ突っ込んでいく。
普通の姉ならここで抱きついたりしがみついたりするのだろうが、
誠の姉は普通ではない。
姉は勢いを殺さずに肩でタックルした。
ドンッ　！　！　と肩が誠の溝に突き刺さる。

「ぐぎぃあああ　！　！　！　！　！　！　」
病み上がりの者にとんだ仕打ちだと思うだろうが、これが彼女なりの愛情表現なのだ。
やり過ぎなのが玉に傷なのだが。

「よかったぁ……もうマコくんが起きないんじゃないかと思って…」

「……相変わらず心配性だな」

白羽　由美。
誠の唯一無二の兄弟で海外出張中の両親の代わりに誠の身の周りの世話もしてくれている。
由美の身丈は、１７０そこそこある誠と同じくらいで女性にしては高い方だ。

首筋が見えるくらいの茶色いショートヘアはしっかり整っており、化粧も抜かりなくしているところを見ると、これから出掛けるところなのだろう。
当然、偽人だ。

誠は溝を押さえつつ起き上がると、由美に疑問をぶつけた。

「姉貴、なんで俺、自分の部屋で寝てんだ　？　家に帰った記憶がねえんだが」

「…ええ、だって私がタクシーで連れて帰ったんだもの」

「…は　？　」

「マコくんが怪我したって電話で聞いて急いで言われた病院に行ったら、見た事ない黒髪の女の子がマコくんを抱えてて、連れて帰ってくれって言うから…」
恐らく、それは桑折　杏だろう。
という事は、あの医者と名乗る男は彼女と同じく真衛隊(しんえいたい)。
傷もしっかり癒えている事だし、敵でないのは確かだ。
あの男が何者なのかは由美に聞いてもわからないだろう。

それよりも、誠の中にはもうひとつ疑問があった。

「ところで、今何時だ　？　」

「　？　朝の9時過ぎだけど…」

「…まずいぞ、遅刻じゃねえか　！　！　」
誠は血相を変えて掛かっていた学生服に手を掛けたが、由美がそれ

を手刀で叩いて阻止した。
「待って！　あなた、重症だったんだしょ！？　だったらもう少し安静にしてなきゃ！」
「もう完治したさ。それよりも重要なのは出席日数だ。この前だって3日も休んだのに今回も……俺、何日寝てた？」
「4日よ」
「ほら前よりも長く休んでる！　これ以上休んじゃいられない！」
本音を言うと、杏に話を聞いておきたかったからなのだが、無関係の由美にこれを言っても行かせてはくれないだろう。
だから学生らしい物言いをしてみたという訳だ。
「とにかく、俺は行く。帰りは多分いつも通り…」
「待ってって言ってるでしょ！」
今度は渾身のボディブローが誠の内臓を抉った。
それでも構わずに由美は言う。
「私がどれだけ心配したかわかってるの！？　マコくんが居なくなったら…私…」
声が震えていた。
泣くのを我慢しているのだろう。
誠は腹部を押さえるのを我慢して、唯一無二の姉の手を握った。
「ごめん、姉貴。もう心配は掛けない。約束する」

由美がゆっくり頷くのを見て、誠は急いで着替えて家を出た。

嘘をついた。
心配などこれからはいくらでも掛けるだろう。
何せもう穏やかな生活はできないのだから。
あの医者は言っていた。
君の日常に戻れる、と。
あれは間違いだ。
今はもう非日常。
誠の日常はもう、帰っては来ない。

誠が到着する頃には1限目が終わり、休み時間になっていた。
誠は教室に入るなり、
「朱美（あけみ）！　ノートの板書（ばんしょ）頼む　！」
「あんた遅刻しておいてサボり宣言するってどういう神経よ」
「ぁあ……じゃあ雅紀（まさのり）でいいや」
周りを見たが、城戸（きど）　雅紀の姿がない。

「城戸なら最近来てないわよ。てっきりあんたと一緒に不登校になったかと思ってたけど」

「へえ、珍しいな。あいつは格好は不良だけど、学校サボる奴じゃないのにな。まあいいや。雅紀がいないなら、やっぱよろしく！」

「あ、ちょっと！誠！」

誠は朱美の返事も聞かずに教室を後にした。

誠はまっすぐに屋上へ向かった。
屋上には案の定、桑折　杏がいた。
杏の方も誠が来るとわかっていたかのような表情を浮かべた。

「久しぶりだな。具合はどうだ？」

「ああ。完璧だ。怪我する前よりもいいぜ。あの医者はなんなんだ」

「医療部隊の事か。案ずるな。うちの部隊はどれも優秀で信頼できる、言わば仲間だ」

「そうかい。その仲間から聞いたんだが、俺を担いで運んでくれたらしいな。それも自分が怪我してるにも拘らず」

「あの野郎、今度会ったら氷漬けにしてくれる」
「おい、言ってる事が大分違うぞ」
さて、と誠が話の軸を元に戻した。
「真人狩りの事なんだが、聞いてもいいか」
「畏(かしこ)まらずに早く言え」
「真人狩りはあんな早くに次の動員を送り込んでくるのか。大男の件からまだ3日しか経っていなかったのに」
そうだな、と杏は少し間を置いて、
「普通の真人を狙っているのならそう早くはない。精々《せいぜい》3ヶ月から半年といったところだ。しかし、お前は普通の真人ではない。以前の自分が偽人だったと言い張り、自身の能力(スキル)に関してほとんど無知だというのだからな」
その言葉を聞いて、誠はある事を思い出した。
「そうだ！　俺の能力(スキル)についてわかった事がある」
誠は自分の能力(スキル)が反射だけでなく、相手の能力(スキル)を奪って操る事もできると伝えた。
「…なるほどな。それなら反射できた事も理屈が通る。だが、真人と偽人を見分けるその瞳とは接点がないな」
それを言われると誠は何とも言えなくなる。

“制御不能(スキルジャック)”などと命名したが、事実、瞳に関しての力はまだ判明していないのだ。
誠が黙っていると、杏が軽い溜め息をついて、
「まあ謎だらけだった力についての解決の糸口を見つけたんだ。つい最近まで一般人だった奴にしては上出来だろ」
皮肉のような褒め方をした杏は、ポケットから何かを取り出し、誠に投げて渡した。
「褒美だ。受け取っておけ」
それは誠でも見た事のある武器だった。
「……スタンガン？」
いつでも携帯できるような護身用小型スタンガン。
初めて握ったにも拘らず、誠の手にしっかりフィットし、ボタンを押すとバチバチッ！！と先端の金属部分に青い電流が流れた。
「自身の能力(スキル)もわからないお前が次に襲われた時にと思って大男と戦った後に発注しておいたんだが、予想外の新手で渡すのが少々遅れてしまった。もしもの時にこいつで時間を稼げ」
「相手は能力(スキル)を使ってくるんだぞ。こんなんで本当に大丈夫なのか」
「だからもしもの時に使えと言ってるだろうが。使い所はその場の状況をよく見て決めるんだ。いいな？」
誠は渋々スタンガンを眺めた。
スタンガンのリーチは短く、接近戦の時でしか使えないだろう。
いつでも使えるように貰ったスタンガンを振り回していた誠は、

ガタン、と。

背後で扉の開く音を聴いた。

後ろを振り返るより先に声がした。

「話は聞かせてもらったよ。紳士淑女諸君」

見ると、そこには女が、いや男が立っていた。

声は男なのだが、容姿はどう見ても女だ。

水色の艶(つや)やかな髪は後ろで太い三つ編みにされており、白い肌は日光に照らされて煌(きらめ)いている。

胸ポケットには白い薔薇(ばら)の花が付いており、とても同じ学生服には見えない。

謎の美男子の出現により、誠と杏の目の色が変わる。

誠よりも先に杏が口火を切った。

「お前、何者だ」

「ふふふ、君達と同じさ」

その言葉で、誠は気づいた。

――――　こいつ、瞳が蒼(あお)い。

蒼く光る目が細く笑う。

「…真人狩りか」

「お前は逃げろ」

「逃げろってここ屋上だぞ　！　」

周囲を見回した誠は自分が握り締めている物に目をやり、何かを閃(ひらめ)いた。

「逃げる必要はねえ　！　今こそこいつの出番だぜ　！　」

誠がスタンガンを構えて美男子に向かって行った。

完全に使い所を履き違えている。

「どこまで馬鹿なんだ、あいつは　！　」

対する美男子が薔薇の刺さっている胸ポケットに手を入れたのを杏は見逃さなかった。

すぐに誠に追いつき、襟首を掴んで引き戻した。

それを見た美男子は更に微笑む。

「引くのかい。まあ僕的にはその方が都合がいいんだけどね」

「都合が…いい…だと　？　」

「僕を、助けてくれないか」

日夜月（ひやづき）高校から少し離れた場所。
日夜月高校の校舎が辛うじて見えるくらいの場所。
そこに男はいた。
男の手には数枚の資料と小型ＧＰＳが握られている。

「やっと見つけたぜ」
男はＧＰＳを懐に仕舞うと、持っていた資料を流し読みし始めた。

「…なるほど、他に真人が２人いるな。しかも片方は護衛付きか。
少々面倒だが、なんとかなるだろ。やっと辿り着いたんだ。もう逃がしゃしねえよ」
男は資料を読み終えるとそれを丸めてその辺に捨てた。

「待ってろよ、俺の護衛対象」

「助けてくれだと？　何者なんだ、お前は」
「申し遅れたね。僕は綾瀬（あやせ）　隼斗（はやと）。君達と同じ真人だが、戦いは好まない一般人さ」
杏の問い掛けに、綾瀬と名乗る美男子は髪を靡（なび）かせながら自分の事についてあっさりと答えた。
「お前、真人狩りじゃなかったのか」
「あんな野蛮人（やばんじん）と一緒にしないでくれ。僕はただ君達と話をしたかっただけだよ」
「でも何かしようとしたじゃねえか」
「攻撃を先にしてきたのは君の方だろ。相手が自分を傷つけようとしてきたら、それを未然に防ごうとするのが一般的対処というものだろ。それとも何か。君は攻撃を喰らい続ける方がいいって言うのかい」
「……」
誠は直感的に悟った。
この男と自分の相性は最悪だという事を。

「君達が数々の真人狩りと戦い、勝利した事は知っている。それを見込んで頼みがある。僕を奴の手から救ってくれ」
綾瀬は頼んではいるが、頭は下げない。
「奴の手からというと誰かに追われているのか。真人狩りか？」

「ああ。…いや、根本的にはそうなんだが、少々複雑なんだ」
綾瀬の輝いた表情が次第に曇っていく。
「僕の家系はほとんどが偽人なんだが、僕は真人として生まれた。以前までは両親と暮らしていた事もあって、真人狩りに襲われる事はなかったんだ。けれど、高校に入って一人暮らしを始めてからだ。僕の生活ががらりと変わったのは」
綾瀬の拳に力が籠もっていく。
「ある日、僕の元に真衛隊と名乗る男が来たんだ。真人狩りは1人になったお前を容赦無く襲いにかかるぞ、とね」
その言葉に、誠は首を傾げた。
「真衛隊が付いてくれるなら何も問題ないだろ」
事実、それがもっともな返しだった。
そもそも真衛隊というものは無関係の真人を真人狩りの手から護るのが役目だ。
現に誠も杏という真衛隊に護ってもらっている。
「まあ普通なら安心だろうね。僕も最初は気を許していたさ。でも、もしそいつが裏切ったとしたら　？　」
「ッ　！　？　裏切るだと　！　？　そんな事は有り得ない　！　！　」
先に反応したのは杏の方だった。
「我々護衛部隊は部隊長に忠誠を誓っている。誠意の無い者などいるはずがない」

「そっちの事情は知らないが、奴が僕に初めて襲いかかった時に言っていた。俺はスパイだ。真の姿は真人狩りだ、とね」

「スパイ…」

杏はまだ有り得ないといった顔をしている。

「奴から辛うじて逃げ延びた僕はすぐさまこの学校に編入したという訳さ。けど、まだ安心はできない。いつまた襲ってくるかわからないからね。だからこうして君達に頼みに来ている」

頼んでいる者の態度にはとても見えないのだが。

「だけどよ、助けろって言ったってそいつがいつ来るかなんてわからないじゃねえか」

「いや、奴はもうすぐそこまで来ている。数日前から悪寒が止まらないんだ」

随分と大雑把だな、と誠は思ったが、綾瀬の深刻そうな表情がそれを言わせてはくれなかった。

すると、杏が携帯電話を取り出して、

「本部の方に確認してみるとしよう。その男がどういう経緯(いきさつ)で我が部隊に潜入したのか知らんが、情報部に聞いてみれば何かわかるかもしれない」

誠達から少し離れた位置に移動した。

それによって、必然的に誠と綾瀬の二人きりになってしまった。

相性最悪な相手に何の話を振ればいいのか、と誠が焦っていると、綾瀬の方から話しかけてきた。

「…君は能力(スキル)を使えるんだよね」

「え　？　あ、ああ」
未完成だとはかっこ悪くて言えなかった。
「その奇妙な力は一歩間違えれば味方も無関係な人々も巻き込んでしまう。そうまでして、その力を何の為に、誰の為に使うんだい？　」
「それは…」
言葉が詰まってしまった。
誠の中でも完璧な答えはまだ出ていないからだ。
「…君に聞いても仕方ないか」
綾瀬は軽い溜め息をついて早々に話を終えてしまった。
話題を変える為に、今度は誠が綾瀬に問う。
「お前、どうやって俺達の事を知ったんだ　？　」
「商店街や駅前といった公共の場であれだけの事を起こせば真人なら誰だって気づくよ。特に君の存在は一般人である僕から見ても十分なくらい異様だ。力も使わずに突っ込んでいく無謀さ。それでも諦めない不屈の精神。そして、土壇場で見せる逆転劇。どれを取っても普通じゃない」
「褒めるんだったらもっと言葉を選んで…」
「褒めてるんじゃない。理解できないと言ってるんだ」
綾瀬は誠の言葉を遮ってまで否定した。
それは照れ隠しなどではなく、本心のままに言った否定だった。

（こいつ、やっぱり嫌いだ）

そうこうしている内に杏が戻ってきた。
携帯電話を握っていない所を見ると、どうやら確認が終わったようだ。
杏は冷静に報告する。

「その男、名前は藤倉（ふじくら）　冬吾（とうご）。東京都南部の領域を管理している部隊の一員だそうだ。歳は３２。芝生のような濃い顎鬚が特長だ」

「同じ東京都の管轄なのに知らないのか　？　」

「私の管轄は西部で、たとえ近い場所だろうと他の部隊との交流は行っていない。少なくとも、私はな。重要なのはそこではない。その藤倉がここ日夜月町に向かっているらしい」

「ッ　！　？　」
綾瀬の表情が一瞬で強張る。

「先日、奴から情報部の方に連絡があったそうだ。護衛対象の住所が変わったから教えてくれ、とな。情報部も疑ったのだが、現在の正確な住所が知りたいと聞かないものだから渋々教えたらしい。もう近くまで来ているのかもな」

「だったら、そんな悠長に構えている暇はないじゃないか。一刻も早くこの町から逃げ……」
綾瀬が弱音を言いかけた時だった。

ドゴンッッッ　！　！　！　と。

何かが爆発したような音と校舎を揺らす震動が一遍にやって来た。
慌てて手摺りを掴んだ3人は爆音の原因を探るべく屋上から校舎の裏にある運動場を見下ろした。
運動場にはトラックが設けられているのだが、そのトラックの中心にクレーターのような大きな窪(くぼ)みができている。
幸い、体育の授業は行われていなかった為、被害者はいないようだ。
誠達と同様に色々な生徒が教室の窓から顔を出してクレーターを確認している。
しかし、屋上から周囲を見渡しても実行犯らしき人影は一切見当たらない。
それでも綾瀬は確証したようで、

「…あいつだ。あの男しか考えられない…」

「ああ。俺だぜ」
不意に野太い声が後ろから聞こえた。

第3章／裏切り者と裏切らない力　後編

「…あいつだ。あの男しか考えられない…」

「ああ。俺だぜ」
不意に野太い声が後ろから聞こえた。
振り返ると、屋上全体を囲んでいる金網の上に男が立っていた。
芝生のような顎髭（あごひげ）、癖毛（くせげ）混じりの黒い短髪、薄汚れた長袖Tシャツ、所々擦り切れたジーパンと、だらしなさが外見から滲（にじ）み出ている。
見たところただのオッサンなのだが、綾瀬（あやせ）が男を見た瞬間、彼の顔から血の気が引いたところを見るにどうやら本物らしい。

「……あ…ああ……」
動揺してうまく喋れない。

「よう、綾瀬。久しぶりだな」
まるで親戚のおじさんのような接しぶりだが、綾瀬の反応は変わらない。

「結構探したんだぜ。おめえが急にいなくなるからよ。けどもう大丈夫だ。俺がまた護ってやんよ」

「お前、藤倉（ふじくら）　冬吾（とうご）だな」
綾瀬の代わりに杏が口を開いた。

藤倉はわざとらしく惚(とぼ)けた顔をして、

「おんや～、そっちの二人はおめえのお友達か　？　随分と礼儀を知らないんだな。まあ綾瀬に免じて許すとしよう。申し遅れたな。俺は藤倉　冬吾。綾瀬　隼斗(はやと)の真衛隊だ」

ゆっくりと頭を下げた。

明らかにふざけている。

だが、無視して杏は続ける。

「お前が我ら真衛隊の裏切り者だという事も、正体が真人狩りだという事もわかっている。観念しろ」

「…そうか、もう知ってるんだな。それなら、消すしかねえな」

ぞっとする言葉と同時に、男の人差し指の上に風が集まっていく。目を凝らさなければ確認できないほどの半透明な風の集まりは、あっという間に野球ボールくらいの形状まで縮まった。

その瞬間、我に返ったように綾瀬が叫ぶ。

「ッ　！　！　まずいっ　！　！　来るぞっ　！　！　」

男が人差し指を突くように前へ押し出すと、指の上に浮かぶ風の球体が凄まじい速度で一直線に飛んでくる。

誠・杏・綾瀬の三人はそれを回避する為にそれぞれ左右に跳んだ。

綾瀬の叫びがなければ直撃だったろう。

だが、それを予測していたかのように、丸みを帯びていた風の塊が唐突に破裂した。

そして横へ跳んだ三人の背を押し出すように強烈な突風が巻き起こる。

誠の足が屋上のタイルから3秒ほど離れ、足が着く前に金網に激突

した。
もしもぶつかった金網が脆(もろ)くなっていたら、今頃誠の体は金網ごと宙へ放り出されていただろう。
同じく飛ばされた二人を見ると、うまくバランスを取って着地していた。

「へー、良い反射神経だな。流石は同僚と言ったところか」
藤倉は誠の事など眼中に無いようだ。

「一緒にするな。貴様は既に私の同僚ではない。裏切り者はここで朽ちろ」
杏が鋭い目つきで睨みつける。
彼女が相手を貴様と呼んでいるのは、彼女の感情が怒りで満ちている証拠なのである。
以前、誠が逆鱗に触れた時もそう呼んでいた。

「言いたい放題言ってくれるじゃないの。ま、あんな連中と一緒にされたら俺の方も困るんだけどな」

「くっ　！　！　」
藤倉の発言に思わず胸ポケットに手を入れる綾瀬だったが、

「おっと、やめておいた方がいい。俺とお前の能力(スキル)じゃ相性が悪すぎる。また無駄な犠牲者が出るぜ」
藤倉の言葉で綾瀬の動きが止まる。

「お前、能力(スキル)使えたのかよ　！　！　」

「……」
誠に対して何も言わない綾瀬。

と、今度は藤倉の方がこんな事を言ってきた。

「……あ、良い事思いついたぜ。お前がウチの護衛対象を返さなかったって事なら、そこの女殺しても正当防衛だって言えばで疑われずに済むな。ついでにウチの護衛対象も片づけられるし、一石二鳥だ」

（こいつ、最低な野郎だな）

誠が怒鳴り返してやろうかと前に出ようとしたが、次の杏の言葉が彼の足を止まらせた。

「そんな廻りくどい事などせずとも、貴様の護衛対象はくれてやる。どこへでも好きに連れてくがいい」

まったく予想外の言葉だった。

杏が偽物に見えたくらいだ。

誠は慌てて言う。

「お、おい　！　お前まで何言ってんだよ　！　綾瀬を助けるって、護るって約束しただろ　！　」

「そんな約束、した覚えは無いぞ。そもそも私の任務はお前の護衛であってこの男の護衛ではない」

杏の言葉を聞いて、綾瀬の表情が絶望的なものとなる。

それを見た誠が更に叫ぼうとしたが、それ以上何も言うなと言わんばかりに杏が手の平を誠の方に向けて訴えを塞き止めた。

「だがその前に、貴様という下劣な背信者を排除する。何よりそれ

が私の任務だ」
誠と綾瀬がほっと胸を撫で下ろし、また藤倉も別の意味で溜め息をついた。
「なんだよ。少しは話のわかる奴かと思ったのに、なんだかんだ理由つけて結局護るのかよ。めんどくせえ女だな」
杏は藤倉の皮肉を無視して、
「おい　！　すぐに綾瀬を連れて下りろ　！　お前達がいても邪魔なだけだ」
視線だけを向けて誠に言った。
「お、おう　！　行くぞ、綾瀬　！」
誠は急いで綾瀬に指示し、ペントハウスの扉まで一気に走り抜けた。
扉に近い所に立っていた綾瀬も急ぎ足で誠よりも先に扉に到達した。
しかし、
「せっかく追い詰めたんだ。そう易々と逃がしてたまるかよ　！」
藤倉が先ほどと同じ風の塊を容赦無くペントハウスに向けて放ってくる。
「ッ　！　！」
慌てて避けようとしたが、完全に背を向けていた綾瀬にそれをかわす事は不可能だった。
綾瀬が反射的に目を瞑(つむ)る。
そして。
ズドンッ　！　！　と。

風の塊が綾瀬の目の前で破裂した。
とは言え、今度は風の塊が意図的に破裂したのではなく、目標に到達する前に何かにぶつかって破裂したのだ。
恐る恐る目を開けると、綾瀬の前に大きな氷の壁ができていた。
風の破裂を物ともしない分厚い氷の壁を出現させたのが誰なのかは言うまでもない。
透き通る氷越しに、顔を顰(しか)める藤倉が見えた。
そこで漸く誠が扉に辿り着く。

「何してんだ　！　早く行け　！　」

藤倉の様子を確認していた綾瀬は、慌てる誠に押されながら屋上を後にする。

「あーあ、また追わなきゃいけねえじゃねえか。どうしてくれんだよ」
特に慌てた素振りもなく、藤倉が頭を掻きながら言った。

「もう負う必要はないぞ。貴様は背信者としてここで処分されるのだからな」

「へー、そんなに自分の力に自信があんのか。その自信を根こそぎへし折るのも悪くねえな」

「……下衆が」

校庭から爆音が聴こえた。
少し間を置いて屋上からも爆音や氷の割れるような音が聴こえてきた。
恐らくは学校中の教室に響き渡っているだろう。
それは3階にあるこの一室も同様だ。

ここには3人の生徒がいた。
いや、正確には今さっき3人になったと言うべきか。
授業中にも拘らず、元々この教室に1人居て、後から来た2人と合流し、今に至る。
椅子に座ってひたすら貧乏揺すりを続ける女子生徒。
壁に寄り掛かって腕を組んでいる男子生徒。
何事もなかったように座って本を読み耽(ふけ)っている女子生徒。

その内に貧乏揺すりをしていた女子が勢いよく立ちあがった。

「この騒ぎは何　！　！　校庭や屋上で何が起こってるの　！　？　いきなりここに連れてきてどういうつもり　！　？　」
女子は壁に寄り掛かっている男子に叫んでいる。
対する男子は冷静な口調で、

「落ち着いてください。今出て行けば、無駄死にするだけですよ」

「だからって落ち着いて避難してなんかいられないでしょ　！　私は全校生徒を指揮する人間なのよ　！　それがこんな場所で膝を抱

えていられる訳ないじゃない　！」
意気込んだ女子はそのまま部屋から出ようとする。
しかし、即座に男子が体で遮り、それを阻止した。
「行っては駄目です。あなたは生きなければならないのですから」
「……どうして……どうして、私なの……」
女子は男子に身を預けるようにして泣き崩れてしまった。
男子は静かにそれを見守った。
今は、それしかできない。

誠と綾瀬は校舎の階段を駆け下りていた。
杏の力も信じてはいるが、もしもの時の為にできるだけ学校から離れた方が賢明だ。
だから一刻も早く校舎から出る事だけを考えて、必死で階段を駆け下りているのだ。
そんな時、同じ階段を誰かが上ってくる音がした。
それも1つじゃない。
いくつも足音が聴こえる。
手摺(てす)りから下の階を見てみると、見た事のある顔ぶれが揃っていた。

「こ、ここで何をしてるんだ、君達　！」
学校教師だ。
騒ぎを聞きつけて何人かの教師が屋上へ向かっているところだった。
その中に誠のクラスの担任である本田もいた。

「おい、白羽　！　屋上で何が起きてんだ　！　？」

「い、いや…」
今、屋上は戦場と化していると言ってもいい。
そこに偽人の教師達が乱入すれば一溜まりもないだろう。
杏の話によれば偽人は能力（スキル）を認識しないよう脳に制御が掛けられていて、それを認識する寸前で逃避、或いは機能停止するという。
もしやその場で気絶してしまうかもしれない。
だとすれば、ここでこの教師達を屋上へ向かわせる訳にはいかなくなる。
誠はどうにかできないかと無い知恵を絞り、

「聞いてくれ、先生　！　屋上に軍の特殊部隊のヘリが来て、学校の屋上っていうシチュエーションで訓練を始めたんだ　！　危険だから誰も近づくなって言ってたぜ　！」
我ながら低レベルな言い訳だと誠は心底そう思った。
きょうび小学生でも言わないだろう。
無論、教師達も信じるはずがなく、

「そんな事有り得る訳ないだろ　！　早くそこを通しなさい　！」
仕方なく白状しようかと誠の心が折れそうになった時、綾瀬が前に出た。

「先生、信じられないかもしれませんが、本当です。終わればすぐ

に引き上げると言っていました」

「し、しかし、我々は何も聞いていないぞ」

「極秘の為、誰にも伝えていないと彼らは言っていました」

「外にあるあの大穴も彼らの仕業なのか　？　」

「その通りです」

教師の1人が少し考え込んで、

「…うむ、綾瀬が言っているのだから真実なんだろう」

「おい…」

「そういう事ならば仕方ない。しかし、さっきの爆発がまたあるかもしれん。生徒達は教室に避難させ、外へは一歩も出さないようにせんとな」

そう言った教師を先頭に、一同が渋々階段を下りていく。

担任の本田だけはまだ納得がいかないといった表情を浮かべていたが、何はともあれ上手くいった。

「お前の嘘、やけに説得力あったな」

「普段の行いが功(こう)を奏(そう)したんだ。君も見習うといいよ」

もういっその事自分の手で半殺しにしたろか、と誠は怒りの拳を必死に抑えた。

「…けど、これで外へは逃げられなくなった。…どうしてくれるんだ。君の下手な嘘の所為だぞ」

「その嘘を拡張したのはお前だろ」

「……」

言葉に力の無い言い争いはすぐに終了し、自分達が次にできる事を探すのに専念した。

「……とりあえず、近くの空いている教室に入ろう。そこで屋上の状況を確認しつつ待機するんだ。君の真衛隊が勝つ事を願ってね」

「ああ…」

誠は少しばかり上を見て、すぐに階段を下りた。

杏の勝利を信じて　――――

屋上の周辺に取りつけられている金網。

その一部が豪快に吹っ飛んだ。

屋上と階段を繋ぐペントハウス。

その壁のコンクリートにベキベキと何ヶ所もひびが入った。

それもこれも全部、藤倉　冬吾の能力（スキル）によるものだ。
奴が放つ風の塊には建物の部位を破壊できるほどの威力がある。
それは認めよう。
だが、それだけだ。
藤倉は金網の上から風の塊を投げてくる事しかしてこない。
ならば、勝ち目は十分にある。

すると、同じ攻撃パターンしかしてこない藤倉が頭を掻きながらこう言った。

「……おもしろくねーな」

「何だと　？　」

「おもしろくないって言ったんだ。真衛隊同士の戦闘は真人狩りとのものよりも更に激しくて熱くてワクワクするもんだろ、普通。それがどうよ。さっきからお前は俺の攻撃を避けてばかりで全然反撃してこねえ。出し惜しみしてんだか、反撃のチャンスを窺（うかが）ってるのか知らねえけどよ、あんまり俺を飽きさせると寿命が縮む事になるぜ」

「ふん。もう勝った気でいるとは、自分の方がやや優勢であるからと言って少々浮かれ過ぎじゃないか」

「お前が本気で来ればもっと浮かれるんだけどな」

「…いいだろう」
杏は足を止め、手元から氷の刃を造り出した。
ガラスのように透き通った刃からは湯気のような真っ白い冷気が出

ており、より一層それを冷たく感じさせる。
しかし、それを見ても藤倉は全く動じない。
「俺に接近戦は通用しないぜ。何せ俺の能力(スキル)は…」
「“空気圧縮(ブラスト)”、だろ」
杏が割って入った。
その言葉を聞いて、藤倉の眉が微かにつり上がる。
「どうして、という面(つら)をしているな。お前の事は情報部の方から全て聞いた。空気圧縮(ブラスト)。周囲の空気を圧縮し、それを一瞬で元の形状に戻す事で爆発的な突風を巻き起こす事ができる」
「……」
「大した力だ。だが、それだけ。それだけだ。ただの突風など私の氷の前では無意味に等しい！」
杏が氷の刃を素早く一振りした。
すると、刃を纏(まと)っていた冷気が斬撃の形となって藤倉目掛けてまっすぐ飛んだ。
それも速度が尋常じゃない。
杏は藤倉が空気を圧縮する前に動きを封じる気だ。
藤倉もそれを理解したようで、空気を圧縮するのを諦め、金網から高く跳んで回避した。
代わりに藤倉の立っていた金網の一部が冷気の斬撃によって凍りついてしまった。
渋々ひび割れたコンクリートに着地する藤倉。
「足場悪りぃな。こんなバキバキにしやがって」
自分でした事に対して文句を垂れながら、指先に小さな空気の塊を

造って身の周りに少量の突風を起こした。

「避けたか。だが、次は外さない」

杏は刃先を藤倉に向けて宣言した。

奴を凍らせる自信があった。

何故なら、そろそろ奴の周りに空気中の水分が集まる頃だからだ。

杏の能力(スキル)は空気中の水分の流れを操り、一ヶ所に集中させて一気に凍らせるというもの。

壁や刃は一瞬で造り出せるが、相手を凍らせるとなるとある程度時間を置いて水分を集めなければならない。

そして、十分に時間を置き、相手が油断している今が絶好のチャンスなのだ。

今なら外さない。

外す訳がない。

と、そこで杏が何かに気づいた。

藤倉もそれを察したようで、

「漸く気がついたようだな。そうだ。お前が当てにしてるもんは俺の周りには無(ね)え。お前の考えてる事なんてバレバレなんだよ」

「貴様…」

“水流結晶(ソリッドアイス)”」

「ッ！！？」

その単語は杏にとって非常に聞き慣れたものだった。

水流結晶(ソリッドアイス)。

杏の能力(スキル)そのものを表す真の名前(スキルネーム)。

それを何故藤倉が知っているのか。

「確か空気にある水分を使って氷を造り出すんだっけか。大方、それで俺の体ごと氷漬けにでもするつもりだったんだろうが、その空気自体を操る俺の前じゃあ無意味に等しいぞ」

「貴様、どうして…」

「どうして知ってるんだって顔だな。お前と同じだよ。俺も真衛隊。バックには情報部もいる。筒抜けなんだよ。お前の事も、使えないお前の護衛対象も」

――――　甘く見ていた。

ただの不潔な男だと思っていたが、この男、かなりの手練(てだ)れだ。
それを見抜けもせずに勝ち目があるだと。
浮かれ過ぎているのはどっちだ。

「さっき言ってたよな、俺の力はただの突風だって。違うぜ。お前の力がただの氷なんだよ」

「……殺す　！　！　」
杏は我を忘れて突っ込んだ。
接近戦が不利なのは百も承知。
しかし、今の杏に何を言っても無駄だろう。
敵に対する怒りと己に対する怒りで、頭に血が上ってしまっているのだから。
その反面、藤倉は冷静だった。
果敢(かかん)に斬り掛かってくる氷の刃を軽々しい身のこなしで次々にかわしていく。
そして、大振りになり、隙だらけの懐に思い切り蹴りを入れた。

杏の体が宙に浮く。
そこで藤倉がニヤリと微笑む。
「もう1つ教えといてやる。俺の“空気圧縮(ブラスト)”は、遠隔操作が可能なんだよ！！」
ググッ、と。
飛ばされた杏の真上に空気の塊が出現した。
それも今までのよりも遥かに大きい。
そして。
ドゴンッ！！と。
爆発的な突風が杏を襲う。
「ぐ、が、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
体が仰向け状態のまま地面に叩きつけられた。
数秒間呼吸する事ができず、叫び声すらまともに上げられなかった。
痛む体をどうにか起こしたが、更なる窮地(きゅうち)が杏を待っていた。
空気の塊が彼女の周りを囲んでいる。
それも一歩も動けないほどぎっしりと。
睨む杏を藤倉が笑って見下す。
舌を出して。
中指を立てて。
「シナリオ通りだ。ここで死ね」
瞬間。
視界が突風に奪われた。

誠と綾瀬は誰もいない図書室へと逃げ込んでいた。
２人共々息を切らせてその場に座り込み、今後の行動について考えた。
屋上からは未だに爆音やら地震やらが響いている。
２人が屋上を出てからもう３０分近く経過しているというのに。
恐らく、杏がまだ戦っているのだろう。

戦闘のプロフェッショナルであるあの杏でさえ苦戦しているというのに、一般人である誠や綾瀬に勝ち目があるとはとても思えない。
ここは素直に身を潜(ひそ)めて杏の勝利を願おう。
これが綾瀬の考えだった。
しかし、誠は違った。

「駄目だ。やっぱり助けに行く」
そう言って、誠は立ち上がった。
馬鹿みたいにまっすぐ前を向いて。

「やめるんだ　！　今行っても彼女の足を引っ張るだけ。ここに居るべきだ　！　」

「じゃあお前はここに居ろよ。俺は行く」
意地でも考えを曲げない誠の決心は固いらしい。
けれど、止めなければならない。
あの男・藤倉の恐ろしさを綾瀬は知っているから。

「君がそこまでする必要はないだろ　！　君は護られる側なんだ！　大人しく彼女の指示に…」

「自分を護る為に誰かが犠牲になるなんて、俺には耐えられない！　！　」

誠の言葉が胸に突き刺さる。
この男は自分とは違う人間だ。
勝ち目の無い戦いに挑み、命を張ってでも誰かを護ろうとする。
そんなやり方は自分には真似できない。
綾瀬は羨(うらや)ましかったのだ。
自分とは正反対の誠の存在が。

綾瀬は出て行こうとする誠の前に立ちはだかった。
そして、自分の中に生まれた疑問を投げ掛ける。

「君はどうしてそこまでできるんだい　？　何故力を使う事に迷いが無いんだい　？　」
その問い掛けが誠の足を止める。

「僕も君達と同様に能力(スキル)が使える。けど、僕はそれを使う気は無い。それが無関係の人達までも巻き込んで苦しめる凶器だからだ。人殺しの道具でしかないからだ　！　それなのに、君は…」

「馬鹿野郎」

震える綾瀬を誠が一蹴した。

「確かにこの力は人殺しの道具になるかもしれない。けど、それがなんだ。この力を人殺しじゃなく大切な人の為に使えば、誰かを護る為に使えば、こいつは人殺しの道具じゃなくなるだろ」

「そんな事はわかっている！　でも、そうしようと思ってもできないんだ！　僕だって護りたかったのに…」

「なら、強くなればいい！！　強くなって力を制御すれば、もう誰も傷つかなくて済むんだ！！」

「……」

「お前、さっき俺に聞いたよな。この力を何の為に、誰の為に使うのかって」

誠は天井を見上げた。

いや、天井よりも更に上で戦っている桑折（こおり）杏を見上げた。

「俺もまだ完璧な答えは返せねえが、少なくとも今の俺は桑折を助ける為に使う」

目の前にいる少年のまっすぐな瞳が紫色に輝き出す。

――――　情けないな、僕は。

何故こんなにも違うのだろう。

何故彼は自分の意思を貫けるのだろう。

何故自分にはそれができないのだろう。

同じ高校生だというのに。

「……僕…は……」

様々な感情が綾瀬の声を震わせた。

自分も力になりたいのに、足が動かない。

そんな綾瀬の肩に手を置いた誠は、わざと無邪気な笑みを見せて綾瀬の感情を落ち着かせた。

「強くなればいいとは言ったけど、無理はするなよ。ここは俺に任せとけ」

屋上から響いていた騒音が漸く収まった。

それは争っていたどちらかが倒れた事を意味する。

無論、杏だった。

彼女は衝撃で砕けたアスファルトの壁に身を預け、しゃがみ込んでいた。

体の所々には殴られたような打撲傷がある。

それでも立ち上がろうと体に力を入れると口から血が噴き出た。

そこへ藤倉が困った顔で近寄ってくる。

「まだくたばらねえのかよ。見掛けに見かけによらずタフだなー」
「……黙れ」
杏が、普通の人間なら誰しもが恐れてしまうであろう鋭い目つきで睨みつけた。
「おー、まだ殺気が放てるのか。なら次はその目を綺麗な顔ごとぶっ潰してやろう」
藤倉が空気の塊を指の先に造り、杏の顔面に近づけた、
その時だった。
ガゴンッ、と。
ペントハウスの扉が乱雑に力強く開かれた。
そして、少年が1人、姿を現した。
「待てよ、オッサン」
白羽　誠だ。
「今お楽しみ中だ。餓鬼はすっこんでろ」
「そうはいかねえな。テメエの都合だけで周りが動くと思うなよ！」
誠が走り出す。
藤倉との距離が5メートルも無いというのに、お構い無しに全速力で突っ込んでいく。

「はっ、わざわざ殺されに戻ってきたって事かよ、小僧　！」
杏に当てようとしていた空気の塊を誠の方へ放つ。
そして、

ドンッ　！　と。
突風が誠と正面からぶつかった。
普通なら後ろへ吹っ飛ばされるだろう。
だが、

「効かねえなあ」
誠の走る速度は落ちるどころか逆向きになった風のおかげで更に増す。
その勢いのまま、拳に力を込める。

「ッ　！　？　」
藤倉が慌てて防御の体勢に入ろうとしたが、一足遅かった。

ボゴッ　！　！　と。
拳が顔面に突き刺さる。
体勢を崩された藤倉は、自分で起こした突風に煽(あお)られて金網にぶち当たった。
藤倉の風圧でボロボロになっていた金網では彼の体を支える事は不可能。
金網は簡単に外れ、彼の体と共に空中に投げ出され、落下していった。

「おっと、少しやり過ぎたか　？　」

「……何しに来た。…お前がいても邪魔なだけだと…言ったはずだ」
杏は厳しい言葉を投げたが、誠の肩を借りて渋々立ち上がった。

「あいつ、死んでねーよな」
「……大丈夫だろう。奴も風使いの端くれ。受け身くらいは取れるはずだ」
「当たり前だ。俺を誰だと思っていやがる」
「！？」
下の方から藤倉の声がした、と思った瞬間に藤倉が遥か上空に舞い上がり、再び屋上へと戻ってきた。
誠に殴られた傷以外の外傷は見当たらない。
地面に落ちてはいないようだ。
藤倉は頭を掻きながら言う。
「あー、そうだそうだ、思い出した。小僧も能力（スキル）使えるんだっけな。女に気を取られ過ぎたぜ。確か“全面拒絶（リフレクト）”だったか。そりゃあ俺の突風も跳ね返ってくる訳だわな」
「どうだ。これでお前の風も効果なしだぜ」
「それはどうだかな」
余裕の藤倉は片足を後ろへ引いた。
すると、引いた方の足の裏に空気が集まり、小爆発を起こした。
その風圧で藤倉が一気に接近する。
誠は担いでいた杏ごと真横へ跳んだ。
そこを空ぶった蹴りが通過する。
攻撃を外したというのに、藤倉の表情に余裕は消えない。

「ほう、試しに蹴ってみたが、避けるって事は反射できないって事だよな」

「くっ　！　！　」

「お前の能力（スキル）がまだ不完全なものだって事も情報部から聞いてんだよ」

再び、藤倉が容赦無く接近戦を挑んでくる。
誠は傷ついている杏と別れ、挑戦を受けて立った。
誠が殴りや蹴りを乱雑に繰り出すが、先ほどの不意打ちとは違って尽くかわされてしまう。
対して、藤倉の攻撃は的確に誠の体にダメージを蓄積していく。
これがプロと素人の差だ。

誠はこれまで真人狩りの動きにはなんとか付いて来れた。
けれど、この男はそれとはまた違う。
動きが予測しづらいのだ。
殴る寸前に肘の先に空気の塊を造って攻撃を加速させたり。
回し蹴りを空ぶった直後に突風を使って、その体勢から踵で蹴ったりと。
近接戦闘と能力（スキル）を的確に織り交ぜてくる。
この男、相当な場数を踏んでいると見て間違いないだろう。

「くそっ　！　！　」
拳に力が入るが、それだけだ。
誠の能力（スキル）では止める事も、反撃する事もできない。
たとえ奴の力を操れたとしても瞬時に繰り出される攻撃に思考が追いつかないのだ。

「おらよっ　！　！　」
藤倉の渾身の蹴りが誠の脇腹に直撃した。
「ぐ、あああああああああああ　！　！　！　」
体が３秒ほど宙に浮いた。
痛みで意識が飛びそうになりながらも体勢を立て直す。
と、蹴りを放った藤倉の背後から氷柱が飛んできた。
が、藤倉はそれを見向きもせずに突風で吹っ飛ばした。
「お前の考えなんてバレバレだって言ったはずだぜ」
背中を掻きながら優越感に浸る背信者。
「よう小僧、わざわざ助けに戻ってきたってのに結局半殺しにされてちゃあ世話無えよな。だろ　？　」
誠は奥歯を噛み締めた。
ここで引き下がる訳にはいかない。
杏の為にも。
綾瀬の為にも。
「さーて、そろそろ終わらせてあいつの生気を吸い取りに行くとするか」
途端に、藤倉の前後に巨大な空気の塊が出現した。
これまでのどの塊よりも大きく、はっきりと見える。
まずい。
このままでは体が吹き飛んでしまう。
かと言って、これを操作して奴に当てようとしても、かわされてし

まえば反対側にいる杏に直撃だ。

「お前らにはしっかり死んでもらわねえと証拠隠滅にならねえからな。ちゃんと死んでくれよ、生贄共(いけにえども)」

「待て　！　！　！　」

藤倉が攻撃を放とうとした時、どこからか声がした。
元を辿ると、扉が開いたままになっているペントハウスの奥からしたようだ。
まだ声の正体を見ていないにも拘らず、藤倉がニヤニヤと笑い出す。

「こりゃ驚いた。俺の標的まで戻ってきやがった」

ペントハウスの中から誰かが現れる。
綾瀬　隼斗だ。
必死に走ってきたのか、恐怖や緊張によるものなのか、額に汗が滲んでいる。

「もうやめるんだ　！　こんな事をして何になるっていうんだ　！　」

「……綾瀬…お前…」

誠が何かを言おうとしたが、藤倉がそれを許さない。

「やめろだと　？　この惨劇は綾瀬、お前の所為なんだぜ。お前が逃げる所為で関係無い人間が次々に傷ついてんだ。わかってんのか

？　」

「この…」

「だって本当の事だろうが。お前が大人しく殺されればそれで済んだんだ。それなのに、いつまでも逃げやがって。この臆病者が　！　」

「……おい」

綾瀬が藤倉に飛びかかろうとした時、誠がよろよろと、それでいて勇ましく立ち上がった。

「実際に殺したのも、関係無い人達を巻き込んだのも、全部お前だろ　！　それを綾瀬の所為にしやがって　！　綾瀬がどんな気持ちで逃げてたかわかってんのか　！　！　自分の存在を責めて、自分の力を責めて、背負う必要の無い責任を1人で背負い込んで。そんなあいつを臆病者扱いする資格は、お前には無えんだよ　！　！　」

誠は激昂(げきこう)した。

あの男だけは絶対に許してはいけない。

綾瀬を裏切り、真衛隊を裏切り、沢山の人の心を踏み躙(にじ)る眼前の敵だけは。

絶対に。

自然と体に力が入る。

「力を使え、綾瀬　！　こいつぶっ倒すぞ　！　」

「そいつは無理だな」

またもや藤倉が割って入った。

「こいつの能力(スキル)は“感性催眠(フレグランス)”。花の香りを操り、それを嗅(か)いだ相手は感覚が麻痺しちまう。だが、風を操る俺には届かないんだよ」

「くっ…」

その言葉に、苦虫を噛み潰したような顔をする綾瀬。

だが、それでも誠は屈しない。

「関係無い　！　お前はお前の全力を奴にぶつければいい　！」

叫ぶだけ叫んで、綾瀬の返事も待たずに走り出す。

綾瀬がその力で奴の動きを封じてくれれば。

勇気を振り絞ってくれれば。

勝てる。

けれど、何事もそう上手くはいかないもの。

藤倉は走ってくる誠を無視して、綾瀬に空気の塊を向ける。

なんだかんだ言って誠よりも綾瀬の能力(スキル)の方を警戒しているようだ。

とは言え、生気を吸い取る目的がある為に綾瀬を殺せない藤倉は、

標準を少し右にずらして攻撃を放つ。

標的にされた綾瀬も咄嗟に走り出すが、一足遅かった。

ドゴンッ　！　！　と。

ペントハウスの壁が砕け、その衝撃で綾瀬の体が吹っ飛んでしまう。

「ぐっ　！　！　……くそ…」

すぐに立ち上がった綾瀬目掛けて追い打ちを掛けようとする藤倉を

誠が止めに入る。

「ぅおおおおおおお　！　！　」

唸り声と共に拳を突き出す。

が、あっさりとかわされてしまう。
そして、体勢が崩れたところへ容赦無く拳を叩き込まれた。

「ぐ、あああっ　！　！　」
藤倉の足元に倒れてしまう誠。
再び意識が薄れていく中、敵の罵声(ばせい)だけが耳に入ってくる。

「あれだけの大口を叩いておいて簡単に倒れてんじゃ、ねえよ　！
クソが　！　」
腹部に激痛が走る。
恐らく、藤倉の蹴りが腹に当たっているのだろう。
更に意識が遠退く。

と、何発か蹴りを貰ったところで藤倉の動きが止まった。

「…何のつもりだ」

その言葉は自分に向けられているものではない事に気づき、ぼやけた視界のまま顔を上げる。
その先には綾瀬が立っていた。
手には純白の薔薇(ばら)が握られている。
しかし、対する藤倉は全く動じない。

「そんなもん向けたところで脅(おど)しにもならねえ。お前がそいつを初めて使った時とは状況が違うんだよ　！　」
にやけながら叫ぶ藤倉はお構い無しに突風を撃とうと指先に力を溜める。

――――　ここだ。

綾瀬だけに意識が向いている今しかない。
隙だらけの今しか。

――――　頼む、動いてくれ。

「うおおおおおおおおおああああああああ　！　！　！」
勢いよく起き上がり、藤倉の体にしがみついた。
ありったけの力を底から絞り出して。

「ッ　！　！　？　なんだ、てめっ、放せっ　！　！」

振り解こうと肘打ちを顔面にされるが、それでも放さない。

「今だ　！　！　お前の力、俺ごとこいつにぶつけろ　！　！」

「　！　？　でも、そうすれば君が…」

「俺に構う事は無え　！　！　これしか手が残ってないんだからな
！　！」

「何言ってやがんだ、テメエは　！　！　俺にはそんなもん効かね
えって言ってんだろうが　！　！　頭のネジが飛んじまったのかよ、
おい　！　！」

綾瀬が誠の目を見た。
誠もまっすぐ綾瀬の目を見た。
紫色に光っているその瞳がどうすれば良いのか、その全てを語っているようだった。
綾瀬は小さく頷いた。

「僕は、もう迷わない」

握っていた薔薇をゆっくりと振りながら、

「純白の薔薇。花言葉は“心からの尊敬”。触感を麻痺させ、動きを封じる」

能力(スキル)を使う時の儀式のようなものなのか。
誠の目には何も映ってないが、恐らく、香りがこちらに向かってきているのだろう。

「馬鹿が！　突風で吹き飛ばしてやる！」
藤倉の前に空気の塊が現れ、

そして、

ドオオオンッ！！！と。

強烈な突風が巻き起こり、綾瀬ごと花の香りを吹き飛ばそうとした。

しかし、

「！！？な、なんだ！？」

綾瀬を狙ったはずの突風が向きを反転させた。
花の香りを丸ごと取り込んで。

「お前、一体何をした！！この、クソが！！放しやがれ！！う、うう、ああああああああああああああああああああ！！！！」

吹き飛ばされた。
二人共々。
そうするしかなかった。
もしも突風を反射してしまったら敵にも当たらなくなってしまう。
ならば、潔く受け止めよう。
綾瀬の決意が籠った一撃なら文句は無い。

誠の手が藤倉から離れ、別々に飛ばされていった。

（……ん？俺、何してたんだっけ。……ああそうだ、綾瀬とあの男の一撃をモロに喰らったんだっけか。…で、今の俺は触感が

痺れてて指1本動かせない……あれ？）
誠が試しに指を動かしてみると、1本どころか5本全ての指が言う事を聞く。
動かしているという感覚がある。
体全体を動かそうとしたが、痛みが蓄積していて確認しようがなかった。
瞼も開く事ができたので青空を仰ぎ見ていると、誰かが覗き込むように顔を出して誠に声を掛けてきた。

「大丈夫か？　動けるかい？」
綾瀬　隼斗だ。
誠が自分の能力の所為で動けないと思い、責任を感じているのだろう、不安そうな顔をしている。

「大丈夫……じゃないな。1人じゃ起き上がれん。手を貸してくれ」
誠が手を上げると、それを綾瀬が慌てて掴み、力強く引っ張って起こした。
体勢が変わった事によって周囲の現状を確認する事ができた。
杏はペントハウスの壁に背を預けて、何か言いたげな表情でこちらをじっと見つめている。
説教確定だな、と誠は苦笑を返した。

問題の藤倉はというと。
綾瀬の能力・“感性催眠”の効果によって体の触感がなくなり、地面に這いつくばっている。
意識はまだあるようで、時折もぞもぞと体の所々が微動する。

「……何故動けるんだろう」
綾瀬が首を傾げる。

「奴はそうまでしてお前の生気を吸い取りたかったんだろう。任務だか私欲だかは知らねえけどな」

「そうじゃない。僕が言ってるのは君の事だ」

「え　？　」

「普通なら君もあいつのような状態になっているはずなんだ。まあ結果論で言うとそうなっていなくてよかったんだけど…」

そう言われて、誠は改めて指を動かしてみる。
やはり、体に痺れは無い。
理由は恐らく彼の能力（スキル）によるものなのだろう。
いや、それ以外他に考えられない。

「多分あれだ。体が無意識に花の香りを反射したんだろう。よくわかんねえけどな」

「どうしてだ」
不意に野太い声が聞こえた。
倒れている藤倉　冬吾だ。
どうやら口ならなんとか動かせるらしい。

「どうして俺の突風が跳ね返ってきた。お前の能力（スキル）は“全面拒絶（リフレクト）”のはずだ」

「反射だけなんて俺は一言も言ってないぜ。俺は反射だけじゃなく相手の能力（スキル）を操る事もできるんだ。敗因はお前の情報不足ってとこだな」

誠が偉そうに言った。
本当のところ、敵に情報を与えてはいけないのだが。
更に杏に睨まれたのは言うまでもない。

「……くそっ。情報部のミスの所為で……　！　！　！」

藤倉が真衛隊への罵声を言おうとした、その時だった。
藤倉の姿が消えた。
それも瞬(まばた)きをした一瞬で。

「なっ　！　！　どこに…」

「こっちだ」

振り返ると、そこには藤倉を肩で担いでいる長身の男が立っていた。
腰の辺りまである銀色の長い髪は背中の辺りで銀色の金属性の髪留めで纏(まと)められている。
腰に収めている拳銃が身を覆っている黒いマントから見え隠れしている。

「お前、誰だ　！　まさか真人狩りじゃ…」

「ソリア・チェスターフィールド隊長」
杏が腕を押さえながら前に出てきて、頭を下げた。

「隊長、ってまさか…」

「そうだ。この方は藤倉　冬吾が所属する部隊の隊長だ」

改めて観察してみるとそれとなく威厳があるようにも見える。
部隊長は無表情のまま、
「私の部下が世話になった。後はこちらで対処する。桑折隊員、御苦労であった」
「ソリア隊長、何故このような事態に…」
「これは私の責任だ。此奴の処罰の件も私が受け持つつもりでいる」
「ですが…」
「何か問題はあるか」
「……いえ」
あの気の強い杏が何も言い返せず、頭を上げられないでいる。
この男、ただ者じゃない。
誠はより一層警戒心を強めた。
次にソリアは綾瀬と目を合わせた。
「綾瀬　隼斗、だったか。君には新しい護衛を就けよう。3日ほどかかるが、それでよければ…」
「いらないね、そんなもの」
綾瀬はソリアが言い終わる前に断言した。
彼の中で漂っていた迷いはもう無い。
「自分の身は自分で護る。そう決めたんだ」

「…そうか。当人が言うのならば仕方ない。では、私はこれで引き上げる。迷惑を掛けたな」
ソリアは3人に背を向け、立ち去ろうとした。

「ま、待てよ　！　まだ話は終わってな……　！　！　？　」
誠が慌ててマントの上からソリアの左腕を掴もうとしたが、そこにはマントの感触だけしか無かった。

「…あ、あんた、腕が…」

誠が言い終わる前に、ソリアはマントを揺らして掴んでいる手を解いた。

「…気をつけるんだな、白羽　誠。貴公の周りには危険が付き纏(まと)っている。それを断ち切るのなら、まずはこの学(まな)び舎(や)から、この町から出て行く事だな。まあ、私の知った事ではないのだが」
そう言い残し、ソリアは消えた。

後に残った3人の中には後味の悪い凝(しこ)りのようなものだけが残る。

「何だよ、あのキザ野郎。学校や町が危険を呼び寄せてるみたいな言い方しやがって」

「……白羽…」
綾瀬が改めて誠に向き直った。

「この借りはいつか必ず返そう。そうでなきゃ僕の気が収まらない」

「お、おう」

「それじゃ、僕は先生方に特殊部隊が無事に帰ったと伝えなければいけないから」
それだけ言って、綾瀬は髪をなびかせながら階段へ向かって行った。
感謝の気持ちが籠もっていないように聞こえたが、去って行くその背中はどこか嬉しげだった。
それだけで十分だ。
誠も微笑んで見送っていると、杏が真顔で寄ってきて、
「おい、特殊部隊とはなんだ。まだ何かあるのか」
「あ、いや違う違う。えーとどこから話せばいいんだかな」
そんな長閑(のどか)なやり取りをしていると、階段前で綾瀬が振り返った。
「白羽。今の男の言葉、強(あなが)ち間違いじゃないかもしれないぞ」
「え　？　」
「君には伝えるべきか迷ったんだが、伝えておいた方が良さそうだな」
「だから何をだよ」
「この学校にはもう1人、真人がいる」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6964t/

真と偽　～シントギ～

2011年10月8日23時34分発行